

仮面ライダードライブ
サーガ・戦姫絶唱シン
フォギア×仮面ライ
ダーチェイサー、チェ
イサーを受け継いだ男

ゲッコン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友を護るために命を張って死んだチエイイス。

そして、20年の歳月が過ぎ、仮面ライダーチェイサーは新たな青年が受け継いだ。

青年が時空の歪みに飲み込まれ、目を覚ますと10年前の世界、青年は鎧をまとった少女達と共に戦う！

「俺は、太陽の未来を救う、生き残りけるものを護る、仮面ライダーとして！」

これは仮面ライダーチェイサーを受け継いだ青年の物語である！

目次

プロローグ	1
飛ばされた過去！	5
傷つけられた日だまり！	15
別れの光	26
最終回、未来の最後の約束、前編。	49
最終回、未来の最後の約束、中編。	66
最終回、未来の最後の約束、後編。	107

プロローグ

今から20年前、ロイミュードとの最終決戦が始まり。仮面ライダーダードライブである泊進之介は、ハートとメディックと共にロイミュードを支配していた敵を倒しに向かい、チェイス、剛はゴルドドライブによって地下駐車場に落とされてしまった。剛は制止するチェイスを無視し、デッドヒートマツハに変身したが、前回の戦いの影響なのか身体にダメージが残っていた。その隙を突かれて剛は変身解除され、助けに行こうと駆け出したチェイスはゴルドドライブの攻撃により壁に叩きつけられてしまった。

「なッ!?ぐあああ!!」

自信の武器が風払われ、膝を着くチェイス。腰に着けていたマツハドライブは、真つ二つに叩き割られていた。

「マツハドライブバーが!?!」

「死ねエエエ!!」

「剛!!。」

《BREAKUP!》

チエイスから奪ったシンゴウアックスを剛に振り下ろそうとしたゴールドドライブの前へ駆け抜け、魔進チエイサーに変身し間一髪で剛を庇う。

「はあああ!!。」

「ぬあああああッ!?!。」

「なッ、チエイスッ!?!。」

「ぬうう… ハアッ!!。」

ゴールドドライブの振るうシンゴウアックスの攻撃で切り裂かれるが、最期の意地と言わんばかりにブレイクガンナーを至近距離で放った。

ードギョーン！ー

「がはあ!?!。」

如何にこれまでのライダーと一線を画すスペックを誇るゴールドドライブでも、流石に0距離銃撃は堪えたらしい。思わぬ衝撃に怯み、大きく後ずさった。

「あ… ああ…」

しかし、そこが限界だった。否、限界はどうに走り抜き、全身から装甲がバキバキと剥がれていき、変身が解除したチエイスは力無く崩れ落ち。

しかし、倒れかけたチエイスを剛が受け止める。

「オイ！嘘だろ…!?!何やってんだッ!?!。」

「剛……これで良いのだ……霧子が愛するもの達を護れるならば……本望、だ……これを……人間が俺にくれた、宝物だ。俺とお前は、ダチではないが……持っていてくれ。燃えてしまうと、勿体ない……」

そう言つて、チエイイスは力無く免許証とシグナルチェイサーを手渡し、黒く焦げ、鋭部が折れそれは、チエイイスが耐え忍んだ膨大なダメージを物語っていた。

「うおおお!!。」バチ、バチバチ

ひび割れた身体から火花を散らしながら最期の力を振り絞り駆け出して、ゴールドドライブに組み付き。

「なツ!?!。こいつ、離せ!!。」

「ぬうう……うおああああ!!。」

ードゴオオオオオン!!。ー

「グアアアアアア!!。」

チエイイスの身体から炎が出て、限界を越えて赤熱化。光と衝撃波を放ちながら、チエイイスは自爆した。

「あ、ああ……ツ!!チエイイスウウ!!。」

そしてゴールドドライブはダメージはあったが生きていたが、剛がチェイサーマツハに変身し、ゴールドドライブを倒し、ベルトだけになった蛮野をシンゴウアックスを持った

剛が振り下ろし破壊した。

その後泊進之介の活躍により全てのロイミュードは倒し、世界は平和になった。それから20年後、2035年、チエイサーは新たな青年が受け継いだ。

飛ばされた過去！

あの戦いから20年後、チェイサーは新たな青年が受け継いだ。

2035年。11月、サーキット練習場

ーブウウウー

サーキット練習場で一人で練習してる青年、青年が乗ってるバイクは20年前にチェイサーが乗ってたライドチェイサー、だが色は全身ライトブルー。

「和希、ライドチェイサーの調整はどうだ?!」

「調整は完璧ですよ進之介さん!。」

「大事にするんだぞ、そのバイクは俺のダチの形見だからな!!」

「和希さんが乗ってるライドチェイサーはドライブピットに凍結した物を僕とベルトさんが和希さんに頼んで調整をしました!。」

「つまり、彼が乗ってるライドチェイサーはもう彼専用で私と英二が設計をして改造したからね!。」

ライトブルーのライドチェイサーに乗ってる青年の名は青島和希、年齢は26歳、この物語の主人公、20年前、小学生の頃にロイミュードに襲われそうな所、チェイスに助けられ、両親と自分の命を救い、彼はこう誓った。(いつか俺もチェイサーのようなヒーローになりたい!!。)と誓い、6年前、20歳の頃、見事、警察試験に合格し、町の平和を護る警察官になった。現在は1年前に現れた新たな脅威、ネオロイミュードを對抗するべく、新署長が新生特状隊を設立し、2代目仮面ライダーチェイサーになってネオロイミュードを倒している、彼の使ってるマツハドライバー炎は、チェイスが使った物を剛が改修し使用したものである!

「しかし、チェイスに救われた少年がまさか、こんな青年に成長したな、進兄さん!。」
「ああ、アイツが死んでから、ずっと頑張ってるようやく夢が叶えた!!。」

「今は、仮面ライダードライブを受け継いだ僕と共にネオロイミュードに立ち向かうために今も戦ってるよ父さん!!。」

進之介と剛を話してる少年の名は泊英二、成長した進之介と霧子の息子。高校卒業後は新生特状隊の刑事所属になった父、進之介と共に難事件を解決、現在はネオロイミュードに対抗すべく、ベルトさんが復活し、二代目仮面ライダードライブになる。年齢は18歳!

「全く、彼がチェイスを受け継いだとは思いましたよ、進之介君!!。」

「ブレン?!」

「私は新生特状隊のブレン署長です!。」

そう、彼の名はブレン、ロイミュードである、20年前のゴールドドライブの攻撃で消滅したが、新たに現れたネオロイミュードに対抗の為、元特状隊のりんなさんがプロトロイミュードの身体にブレンのデータを入力し、復活、現在は仮面ライダーブレンになりながらも心は正義になり、新生特状隊の署長に着任、グリーンのスーツが特徴、ただし頭はハゲです。ピカン

「そう言うなよブレン署長、アイツだって、自分なりに守るべき物のために戦ってるさ!!」

そう、現在、進之介は43歳、剛は39歳。進之介は新生特状隊の警部になり、剛はプロのカメラマンとして、編集部の仕事に就き、それぞれ頑張っている。

「それじゃ進之介さん、少しパトロールから行つてきます!。」

「おう、気をつけろよ、和希!!。」

「進兄さん、アイツ、どこ行くんすか?!。」

「剛叔父さん、忘れました?今日は!!。」

「そういえば今日は彼らの命日ですね!!。」

ブレンが話した彼らの命日とは!!和希はライドチェイサーに乗って、星の景色が見え

る森へ行き、そこには2つの墓があった、一つ目は剛が建てたチェイスの墓、その隣は青島未来の名前が描かれた墓、そう、去年、彼女と幼なじみの響と和希と一緒に結婚したその数ヶ月後、病で亡くなった!

「未来、チェイスさん、来たよ、先月は来られなくてゴメンな、ネオロイミュード討伐事件や仕事が忙しくて、でも俺はこの通りピンピンだよ、ブレン署長が新生特状隊を設立してから英二と一緒に戦って、進之介さんや切歌や調達と一緒に難事件や犯人捜しも色々頑張ってるよ!!。」

和希はチェイスと未来の墓に花束を供え、先月チェイスと未来の墓に来られなかった理由と自分達が勤めてる新生特状隊の話をし。

「あら、和希君?!、ここにまた来たね!!」

「マリアさん、翼さん、お久しぶりです!!。」

「元氣そうだな、青島、そっちの方は頑張ってるか?!」

「はい、英二と二人で頑張っています、切歌と調の方は英二のサポートや進之介さんの犯人捜しもフォローしてます!!。」

和希と話してるこの二人は風鳴翼とマリア・カデンツァヴナ・イヴ、翼は現在、緒川慎二と結婚し、1児の娘を産み、タレントとして頑張っている、年齢は28歳、マリアも同じく、結婚し、1児の息子と旦那を持ち、俳優として頑張っていた、年齢は31歳、

今日は翼とマリアはオフで和希がチエイイスと未来の墓に訪れたのを見かけ、お参りをする。

「切歌も調もすっかり新生特状課の仕事に馴染んでたわね、二人の様子はどうか?！」

「ええ、去年、進之介さんからの約束で英二のサポートや難事件のフォローをちゃんと頑張ってますよ!!。」

「未来が亡くなって一年がたったな!!。」

「翼さん、マリアさん、去年は未来と響と俺の為に結婚式を祝ってくれてありがとうございます。ございます!。」

「気にするな青島、私たちも小日向には感謝してるぞ!。」

「そうね、私たちも未来を支えたからね!!。」

和希は去年、自分と響と未来の為に結婚式を祝ってくれたことをマリア達に感謝し、握手をした。

「それにしても、10年前、驚いたわ、フロンティア事変の頃、翼と私のライブ会場、私と切歌と調が翼達と対決した時にチエイイサーが現れたなんて!!。」

「そうだな、俺が10年前の過去を変えてしまったから未来は歩けない身体になってしまいましたよ!!。」

マリアは10年前の翼とマリアのライブの頃、翼と響とクリスがマリアと切歌と調と

の対決の時に現れた仮面ライダーチェイサーの事を語り、和希は目をつぶって数週間前の事を思い出す。

(うおー!!)

《ヒツサツ、フルスロットル!!》

ードゴーン

数週間前の廃工場でのネオロイミュードを討伐し、ライドチェイサーに乗って帰還しようとしたチェイサー。

(何だ?!)

ヒヒヒ

ライドチェイサーから通信が鳴り、それを出るチェイサー。

(和希さん、聞こえますか?!)

(英二か?、今ネオロイミュードを倒して帰還するところだ!!。)

(今すぐ逃げてください!!)

(切歌と調と英二が君が倒したネオロイミュードの情報を調べた結果、奴の身体にはタイムトラベルが発生し、吸い込まれるんだ、今すぐ離れるんだ!!)

ベルトさんの忠告を聞いてライドチェイサーに乗ってこの場を離れようとする。

(何だ?ライドチェイサーが浮かぶ?!)

時空の吸引が強くなり、ライドチェイサーに乗ったままのチェイサーもろとも吸い込まれていく。

（くっ、うわああああ!!）

チェイサーがライドチェイサーもろとも吸い込まれ、時空の扉が閉じる。

（和希さん?!）

（通信が切れた?!）

（ヤバイデス!）

（和希!!）

時空に飲み込まれた和希が目を覚ますと、彼はライブ会場の観客席で倒れてた。

「ここは?!」

「そうだ、俺は、タイムトラベルに飲み込まれて飛ばされたのか?!」

「そうだ、通信だ、英二?、切歌?、調?、くっ、駄目か!!」

和希は通信機を出して英二達の連絡をしたが電波が切れ。

「きゃあー!」

「何だ?!」

和希がライブ会場で女性の叫び声を見ると。

「これは?!!」

和希が目の前で見た光景は、ステージで対決してる鎧を纏った3人の少女と女性1人と2人の少女、そして観客席で現れたカラフル色のおたまじやくしの怪物。

「あれは、マリアさん、切歌、調? 何で翼さん達と対決してるんだ?!!」

和希はステージのマリアと切歌と調がなぜ翼達と対決してるのを見て、ポケットからスマホを出して時間を見ると。

「2025年? まさかここは10年前の過去の世界なのか?!!」

「助けてくれ!!」

ライブ会場から市民の悲鳴が叫び。

「迷ってる場合じゃない、民間人を守る!!」

和希はマツハドライダー炎を腰に装着し、シグナルチェイサーを出し、そして。

「変身!!」

シグナルバイク! ライダー! チェイサー! !

白亜のボディに紫のラインの入った、ライダースーツのようなライダー、仮面ライダーチェイサー。

「今、助けてやる!」

ブレイクガンナー!

チエイサーに変身した和希はブレイクガンナーを出し、民間人周辺のノイズに向けて銃弾を放ち、銃弾がノイズに当たり、消滅！

「大丈夫か？早く逃げろ！」

「ありがとうございます！」

「くっ、これじゃキリがない、ならば！」

チエイサーはドライバーのホルダーから青いシグナルバイクを出し、マツハドライバー炎に装填！

シグナルバイク！カクサーン！

ドドドドドド

シグナルバイク、カクサーンを使って、ブレイクガンナーの銃弾の乱射を数十体のノイズに命中。

「きゃあ！」

「まだ残ってたか?!」

チエイサーは逃げ遅れた人を庇い、後ろを見る。

(なっ、君は？未来?!)

チエイサーが守った人は黒い髪で白いリボンの少女、小日向未来。

「うおー！」

チェイサーはノイズに向けて右ストレートパンチし、ノイズを消滅。

「早く逃げろ、未来!」

「はい、あの人? 何で私の名前を知ってるの?!」

未来は急いで弓美達と合流し、ライブ会場を出る。

「よし、後はアイツらの事情を聞く!」

シンゴウアックス!

チェイサーはシンゴウアックスを出し、翼達がいるステージ会場へ向かって飛ぶ、そう、ここからがチェイサーの戦いが始まる。

傷つけられた日だまり！

海上の一角、そこには戦場となっていた。

数隻の船——米国所属の艦艇、その全ての甲板にはノイズが出現。だが、一隻だけは駆逐され、甲坂には対峙してる仮面ライダーチェイサーとギアを纏った響と翼とクリス。シンフォギアを解除して拘束されている調と切歌、私服姿の調は大人しくなる、すると。

——ドーン——

艦艇の衝突音が鳴り、駆けつけるチェイサーと翼と響とクリス、すると。

「なっ？ 未来?!」

「その姿はシエンシヨウジン？ 何故、小日向がそれを纏ってる?!」

チェイサー達の前に現れたのは、下半身を隠す布が少ない中華風の防護服、それを捕うように足には鎧のような脚部ユニットが装着し、左手には分厚く平らな扇を閉じたような武器が握り、そして頭部につけられたヘッドギア、間違いなく小日向未来、だが未来の光ない瞳に変化は見えない。

「ならば、そのギアを破壊して正気に戻す。」

チェイサーはシンゴウアックスを構え、未来の方へ向かい振る。

「うおおおおお！」

重圧に今気づいたかのように未来は頭部のヘッドギアが変形し、バイザーとなつて未来の両目を隠す。

ーカキンー

「なっ?!」

チェイサーの振つたシンゴウアックスは未来の扇形の武器で受け止める。

一閃

「ぐあああー！」

紫の鏡の形した小型兵器から放つビームがチェイサーに当たる。

「和希さん?!」

「見てられねーぜ、今助けてやるぜ！」

翼とクリスはチェイサーの援護に駆けつけようとするが。

「そうは、させませんよ！」

ウエルはヘリからソロモンの杖で次々とノイズを呼び出し、翼とクリスの所へ向かう。

「こいつら、邪魔するんじゃない！」

「翼さん、クリスちゃん、未来は私が止めます！」

「立花、無理するな、それ以上ギアを使いすぎたらお前はもうギアを纏えなくなるぞ！」

翼はノイズに交戦しながら響に忠告した。

「でも、和希さんは未来を救うために戦っています、見ていただけませんか！」

「おい、バカ！」

響はチエイサーと戦ってる未来の所へ駆けつける。

「未来、もうやめてよ、和希さんは私の為に未来を助けようとしたんだよ、どうして傷つけるんだよ?!」

ーブーンー

「がはっ！」

未来はギアの触手のようなものを響にぶつけ、痛めつける。

「私は響を失いたくない、傷つけたくない、響をこれ以上戦わせたくない、だから私はドクターに頼んでギアを纏えるようにしたのよ！」

「響、くつ、ウエル、未来に何をした?!」

「くくく、彼女の体内に大量の Lincoln を投与し、ギアからのバックファイアにならないようにしたんだよ、つまり彼女は僕の計画の為の駒、つまり、英雄の僕の為の

兵器だよ、ハハハハハ!

ウエルは笑いながら未来をあんな風になったかを説明し、すると。

「お前、未来をあんな風にし、響に戦わせようとするのか?、クズ英雄野郎、お前だけは許さない!」

チェイサーは変身解除し、デッドヒートシフトカーを出す、すると、デッドヒートシフトカーが黒くなり、怒りの怖い目で未来を見る。

ギロ!

「ひいっ!」

未来は和希の目をみて怖がり、そして和希は黒いデッドヒートシフトカーをマツハドライダー炎に装填。

「変身!!」

シグナルバイク!シフトカー!チェイサー、デッドヒート!

和希の周りには黒いタイヤが4つ現れ、和希の身体に包み、変わる、ボディはデッドヒートの形だが色は黒い、脚と顔はチェイサー、そう、これが仮面ライダーチェイサーデッドヒートだ。

「なんなの、それ?私と響の邪魔をしないでよ!」

未来はギアの触手でチェイサーに向けて狙う、すると。

ガシッ!

チェイサーは未来のギアの触手をつかみ。

ーバキーンー

未来の触手をつかんだ手で握り潰す。

「なんだ?、あのチェイサーは?!」

「だが、小日向の攻撃を破壊するとは!」

翼とクリスはデッドヒートになったチェイサーを見て驚き、すると。

バースト! キュウニ! デッドヒート!

チェイサーはデッドヒートシフトカーを入ったままスロットパネルを開け、ボタンを

四回押し、すると、チェイサーの身体から黒い煙が出た。

「うう、うがああああ!!」

チェイサーは暴走するような声をし、我を忘れたかのようになり。

「ひっ、来ないで!」

一閃

未来はギアの鏡の小型兵器をチェイサーに向けて狙い射ち、すると! チェイサーはいなかった。

「えっ? どこ?!」

「がああああ!!」

ーブーンー

「きゃっ!」

チェイサーはデッドヒートの力で速く動き、未来を攻撃する。

ドガツ、バキッ!

チェイサーは未来の顔を痛めつけるように殴り続ける!

「ひっ、怖い!」

未来は体制を建て直して、チェイサーに向けて鏡の小型ビットのビームを狙い射とうとした!

(壊せ、叩け、奴を動けなくなるなるまで倒せ!!)

チェイサーから小さな声が

聞こえ、バイラルコアを出す。

コブラバイラル! チューンアップ!

チェイサーはコブラバイラルコアを出し、コブラの形した武装を右腕に装着。

「がああああ!!」

チェイサーは右腕に装着したコブラバイラルを未来の所へブン回し、鏡の小型ビットを破壊し、未来の脚部のギアにぶつけ、艦艇の甲板の衝突し、倒れ、すると。

ミシッ！

未来のギアの両足に亀裂が出る。

「うがああああー！」

チェイサーは倒れた未来のところまでもうスピードで走り、血が出るまで殴り続け。

ービキ、ビキビキビキー

チェイサーは未来の装着したヘッドギアを引きちぎり、海に捨て、殴り続けた。

（もうやめてよ、和希さん、未来が死んじゃうよ、やめてー！）

（あいつ、あのバカの声が聞こえねーのかよ?!）

響の叫び声を聞いて無視するチェイサー、すると。

「うがああああー！」

チェイサーは未来の脚を掴み、未来の空中に投げ捨て、そして。

ヒツサツ！バースト！フルスロットル！

チェイサーはマツハドライバー炎のスロットパネルを開き、スイッチを押し、ブーストイグナイターを叩き押し、空中に投げ捨てた未来に向かって飛び、ライダーキックを放ち、未来の胸のコアを貫き、甲坂に墜落、未来は裸体になり、身体から出血多量出てくる。

シンゴウアックス！

「ううう、うがああああ!」

「和希さん?まさか小日向の息の根を止めるのか?やめろ!」

チエイサーは暴走し、シグナルチエイサーをシンゴウアックスに装填し未来の所へ歩き。

ヒツサツ!マツテローヨ!

「大変だ、未来が危ない!」

響はシンゴウアックスを構えたチエイサーの所まで走りだし。

イッテイーヨ!ヒツサツ!フルスロットル!

—ドーン—

「立花?!」

間一髪、チエイサーの振ったシンゴウアックスを響の右腕のアームドギアで受け止める。

「未来を死なせたたくない、私が未来を守るんだ!」

—バチバチバチ—

「うう、うわああああ!!」

チエイサーの頭から電流が流れ、頭を抑える。

「ひ…びき、俺を…止めてくれ!」

響の耳に聞こえるチェイサーの声、チェイサーは響にチェイサーを止めてくれよと伝えた。

「立花? どうした?!」

「和希さんから小さな声が聞こえました、俺を止めてくれと!」

「どうすんだよ、あいつを止めるには!」

「きつと、和希さんのベルトに入ってる黒いシフトカーから電流が流れ、暴走してる、あのシフトカーを外すぞ!」

「翼さん、クリスちゃん、フォローをお願いします、私があシフトカーを外します!」

「わかった、立花、気をつけろ!」

「よっしや、いくぜ!」

クリスの掛け声で響と翼はチェイサーの元へ向かい、アームドギアを構えた。

「和希さんはシンゴウアックスを大きく振るのか? ならば!」

翼はチェイサーが振る、シンゴウアックスを真横へ避けて、反撃するが、
ブレイクガンナー!

チェイサーは真横へブレイクガンナーを構え、翼へ射ち続ける。

「ぐあああ!」

「翼さん?!」

「目を覚ましやがれ、バカ野郎!」

クリスはギアのクロスボウをチェイサーに向けて射つ。

「うがああああ、あああ!」

チェイサーは頭を抑えつつ、暴走を止めようとする。

「今だ、バカ!」

「和希さん、今、助けます、どりゃー!!」

響は突っ走ってチェイサーのベルトを掴み、電流が流れながら、デッドヒートシフトカーを抜く。

「うぐ、ぐわああああ、ああああ!」

オツカーレ!

チェイサーは変身解除し、膝をつき。

「良かった、和希さんが無事で!」

それと同時に響はギアを解除し、胸の中の GANG ニールを失い、普通の人間に戻り、響の GANG ニールのペンダントはマリアが奪い、切歌を連れ戻し、クリスは翼を射ち、マリアのいるヘリに乗り、去った、調は大人しく拘束。

「俺は? 一体何を?、」

和希は膝をついたまま気がつき、すると見た光景は。

「響？未来？、翼?!」

「まさか、俺がデッドヒートシフトカーを使ったせいで皆を傷ついた?!」

「うう、うわああああ!!」

BREAKUP!

和希は泣き叫びながら魔進チエイサーに変身し、バットバイラルコアを使って背中につけ、ライドチエイサーに乗り、響達の元を去る。特異災害対策第二課が響達を回収し、未来の容体は、医務室でLincornの体内洗浄し、ギアの後遗症はないが、チエイサーの攻撃を受け、出血多量で手術し、一命は取り留め、生命維持装置で昏睡状態になる、全身は包帯だらけだ。

それと同時にフロンティアが浮かび、響達はドクターウエルの野望を阻止するために進行、和希は魔進チエイサーになり、ライドチエイサーに乗り、フロンティアへ向かった。

別れの光

宙に浮かんだフロンティア、翼とクリスはソロモンの杖を回収し、響とマリアのいるフロンティアの最終区域へ向かい、最終区域にはウエルがナスターシャ教授を月へ飛ばされ、すると。

——ドドドドド——

最終区域のウエルの周りに銃弾が放つ。

「見つけたぞ、ウエル！」

「お前は？ チェイサー、何故ここに?!」

「今度こそ息の根を止め、未来の仇をとる。」

最終区域にひと足先にたどり着いた魔進チェイサー。

「クククク、ハハハハハ！」

「何がおかしい?!」

「僕の計画を邪魔をしたチェイサー、僕を裏切ったマリア、君達には死んでもらうよ！」

ウエルは左腕のネフィリムを挙げ、突然光が出る。

「ハハハハハ、これで僕は英雄だ、そして全世界に僕の力を証明するとき来たんだ、現れよ、完全聖遺物生命体ネフィリムよー！」

ウエルはネフィリムの名を呼び、フロンティアの地中から地鳴りが出る。

「グルルルル、ガアアア！」

「さあ、ネフィリムよ、僕とひとつになり、僕の邪魔をしようとした奴らを叩きのめそう！」

ウエルはネフィリムの所へ向かい、融合し、ネフィリムの胴体からウエルの顔が現れる。

「それがどうした？、お前は俺が撃つ！」

チューン！スパイダー！

魔進チェイサーはブレイクガンナーにスパイダーバイラルコアを装填し、スパイダーバイラルを右腕に装備し、ネフィリムと融合したウエルに立ち向かう。

「うおおおー！」

ーカキンー

「何?!」

ネフィリムウエルはスパイダーバイラルを装備したチェイサーの攻撃を防ぎ。

「バカめ、そんな攻撃で僕に通用するとも思ったか?!」

ーブーンー

「ぐわあー!」

ネフィリムウエルは頭突きをし、チエイサーに命中し、変身を解除。

「次はマリア、立花響、お前達だー!」

ネフィリムウエルはマリアと響の所まで向かい、すると。

チャージ! エグゼキューション!

和希は生身のまま、ブレイクガンナーでチャージし、ネフィリムウエルに攻撃したが。

「何だ? まだしぶといなあー!」

「なっ?、効かないだど?!」

ブレイクガンナーのチャージ攻撃を受けても効かないネフィリムウエル、そしてマリアと響に襲いかかる。

「立花?!」

「マリア!!」

最終区域のたどり着き、二人の名前を叫ぶ、翼と切歌と調、すると。

ーブォーンー

ネフィリムウエルの足元から時空の扉が開いた瞬間。

「へっ? 何で赤い車が出てくる?!」

ドン!

「ギャー!」

時空の扉が開き、現れた赤い車がネフイリムウエルの胴体のウエルの顔にぶつけ、着地する。

「てっ? なんじゃあの車ー?!」

「あの車はトライドロン、まさか、アイツか?!」

時空の扉から現れた赤い車が現れたのをツツコミするクリス。和希は赤い車の名を呼び。

ガチャ!

トライドロンの扉が自動で開いて、中から白い服をまとった少年が現れた。

「英二、来てたのか?!」

「和希さん、やっと見つけましたよ!!」

「探すのに私も英二も苦労したよ!」

「ベルトさん、どうやって来たんだ?!」

「ああ、君が時空空間に飲み込まれてから、私と英二がトライドロンの運転席にタイムトラベルシステムにチューンして起動し、チェイサーの反応がし、いいタイミングで見つけたよ!」

ベルトさんは和希にどうやって来たかを理由を話した。

「初めまして、10年前の響さん、クリスさん、翼さん、マリアさん、切歌さん、調さん、僕は泊英二、和希さんと同じ10年後の2035年の未来から来ました！」

「私は、クリムスタインベルト、ベルトさんだ！」

「おい、何でベルトがしゃべってんだー?!」

英二は響達に軽く挨拶をし、クリスは英二の腰に巻いてるベルトさんの喋りでツツコム。

「翼さん、喋るベルトは面白いですね！」

「ああ、さすがに驚くな！」

「よくも僕の顔に傷をつけてくれたな、赤い車のガキ、叩き潰してくれるー！」
ネフィリムウエルは体制を立て直す。

「さあ、英二、行こうか！」

「はい、ベルトさん！」

スタート！ユア！エンジン！

英二はドライブドライバーのエンジンキーを軽くひねり、ホルダーから赤い車のシフトカーを出し、後ろを反対に回し、変身ポーズをし、左腕のシフトブレスに装填しレバーのように引き、そして。

「変身!!」

ドライブ! タイプ! スピード!

変身と同時に赤いアーマーが英二の体に装着し、トライドロロンからタイヤが出てきてボデイに装備、そう、かつて父、泊進之介が変身した、仮面ライダードライブだ。

「アデア? 何デスカ、タイヤをつけた仮面ライダーは?!」

「でも、ちよつとカッコいい!」

調と切歌は仮面ライダードライブに驚く。

「ひとつ走り付き合ってください!」

「OKだ、英二!」

「何がひとつ走り付き合ってくださいだ、僕をなめているのか?!」

ネフィリムウエルは叫んでドライブを襲う、すると。

ードンー

「グフフフ、何?!」

ネフィリムウエルが駄々をこねた攻撃をすると、ドライブがいない。

「奴め、何処だ?!」

「ここです!」

ーブオンー

「えっ？ギャー！」

ドライブは目にもとまらない速さでネフィリムウエルを攻撃する。

「何故、僕の攻撃を避ける、どうやって避けたんだ?!」

「フッフ、私達を甘く見ないでくれたまえ、私達のシフトカーは目にも止まらないグローバルフリーズ対抗に搭載している、すなわち、相手が攻撃しても、その攻撃を素早くよけるんだ！」

「目にも止まらない速さなんて、驚いたわ！」

「ああ、さすがに私達も目が疲れるな!!」

翼とマリアはベルトさんの説明で少々疲れる。

「さあ、行きますよ、何だ?!」

ドライブの体から突然の光が現れ。

「何だ?!」

それと同時に和希や装者6人の体から光が現れ、装者6人の光が和希とドライブの手のひらに渡り、すると。

「これは?!」

「彼女達の光で新たなシフトカーとシグナルバイクが誕生したんだ！」

ドライブの手のひらにはオレンジと黄色のカラーのデッドヒートシフトカーと銃の

形をした赤いシフトカーと刀の形をした蒼いシフトカーになり、和希の手のひらにはシルバーのシグナルバイクと緑色の鎌の形をしたシグナルバイクとピンク色のヨーヨーの形をしたシグナルバイクになった。

「俺は：。また仮面ライダーのなるのか？、俺はもう、変身しないんだ！」

和希は艦艇戦の時、未来達を傷ついたのを思いだし、戸惑う。

「和希さん、戦ってください、和希さんは私達や未来を守るために戦ってます、だから立ち上がってください！」

「和希さん、あなたは立花や雪音、私と共に戦う仲間だ、迷わず進み続けろ！」

「オメーはバカや未来を支え、アタシを喜ばしてくれてサンキューな、アタシも嬉しいぜ！」

「あなたは私達に命の大切を教え、心と心が本当にわかり会える事を知ったわ、ありがとう！」

「アタシと調もマリアやこの人達の気持ちが分かるデス！」

「私も、マリアや切ちゃんを助けてありがとうございます、だから！」

「[[[[[[立ち上がって、チェイサー!!]]]]]]」

響達は和希に励ましの言葉をし、すると、3つの光が人影になり、和希のまえへ歩く。

「えっ？あれは、未来?!」

「セレナ?!」

「もう一人は?!」

響とマリアが見た人影は、未来とセレナとチエイイスだった。

(和希さん、戦って、私は和希さんが戦わない姿、私は見たくない、立ち上がって!)

「未来!!」

(和希さん、マリア姉さんを守ってくれてありがとうございます、今度は私がマリア姉さん達を守ります!)

「セレナ!!」

(和希、それでもお前は剛が認めた仮面ライダーだ、今でもお前はまだ戦える!)

「チエイイスさん!!」

「そうだ、俺はもう一度、太陽の未来を守る為に戦う、俺はもう迷わない!」

和希は顔をあげ、まっすぐな目付きになり、光の人影の未来とセレナとチエイイスがつになり、新たなシフトカーが和希の手に渡る。

「未来、セレナ、チエイイスさん、一緒に戦おう!」

「(ここじゃ部が悪いな、なら、場所をかわろう!」

「ドーン」

ネフィリムウエルは最終区域の壁を突き破り、フロンティアの地上へと降りる。

「英二、行くぞ！」

「はい、和希さん！」

和希はマツハドライダーを腰につけ、新しいシフトカーを装填。

シグナルバイク！シフトカー！

「変身!!」

ライダー！シエンシヨウジン！

変身と同時に和希の体に紫のアーマーを装着、ボディにはデッドヒートの紫色、脚には未来のギア、シエンシヨウジンの脚、頭には同じヘッドギアを装備、そう、これが、仮面ライダーチェイサーシエンシヨウジンだ。

「俺は太陽の未来と全ての自由と幸せの為に戦う戦士、仮面ライダーチェイサーだ!!」

「やったー、仮面ライダーチェイサー復活だよクリスちゃん！」

「はしゃぐなバカ、でも、良かったな！」

和希が仮面ライダーチェイサーに変身したのを喜ぶ響とクリス。

「これは奇跡だ、新しいチェイサーだ！」

「ベルトさん、僕達もいきますよ！」

「OKだ、英二!!」

ドライバーはドライバーのエンジンキーをもう一度軽くひねり、オレンジと黄色のデッ

ドヒートシフトカーを

シフトブレスに装填し、引いて、そして。

ドライブ！タイプ！ガングニール！

ドライブの体がデッドヒートになり、色がボディと顔はオレンジに染め、腕と脚は黄色に染まり、響のギア、ガングニールの腕パーツを装備し、ヘッドギアを装着、そう、これが仮面ライダードライブ、タイプガングニールだ。

「あつちは立花のギアを装備したな、でも、体が黄色いとオレンジをモチーフにしたカラーとは！」

「でも、案外カッコいい！」

翼と調はタイプガングニールに変身したドライブを見て、調は案外カッコいいと言った。

「さあ英二、行こう！」

「はい、何だ?!」

新しいタイプにチェンジしたドライブとチェイサーの体が光り、響達6人の体の中に入り、光り出す。

「この耀きは?!」

「何だか暖かくなってきたぜ！」

「セレナや、みんなの思いが体に伝わってくるわ！」

「アタシ達もやる気万全デス！」

「これが、思い！」

「私達はみんなの思いや、未来達の光が力になる！」

「『『『これが、私達の光だー！』』』』』」

響達の叫び声で6人の体が耀き、6人のギアがエクストライブになった。

「これは？、そうか、ガングニールシフトカーと、シエンシヨウジンシフトカーは彼女達のギアを最大限まで高め、エクストライブになるための力になるのか！」

ベルトさんはガングニールシフトカーとシエンシヨウジンシフトカーの分析をし、解析した。

「なるほど、その2つのシフトカーが彼女達に力を与えるのか、ならば、これならどうだ！」

「グオオオオオオ」

ネフィリムウエルは叫んでノイズを大量にフロンティアの地上へと出現。

「ドクター、これに懲りてまだ企んでるわね！」

「マリアさん、みんな、きを抜かずに行きましょう！」

「ああ、今の私達なら、やれるさ！」

「そうか、このシフトカーは、銃口から無数の銃弾が放って敵に命中できるのか！」
ベルトさんは装備したイチイバルタイヤの解析し、声をした。

「やるな、あのドライブ、アタシも負けてられねえな！」

クリスもドライブに負けずにノイズ共を狙い撃つ。

「やるな、2人とも、だったら俺も！」

チエイサーはホルダーからピンクのヨーヨーの形したシグナルを出し、マツハドライブバー炎に装填。

シグナルバイク！シエルシャガナ！

サウンドと同時にチエイサーはブレイクガンナーから銃弾を放ち、銃弾が調が装備してたシエルシャガナのヨーヨーになり、ノイズ共を真つ二つに消滅。

「やりますね！」

「ありがとうな！」

調はチエイサーを誉め、チエイサーは調に感謝の言葉を口にした。

「ベルトさん、次はこれで行きましょう！」

ドライブは次に使うシフトカーをホルダーから出し、出したのは刀の形した蒼いシフトカーをシフトブレスに装填し、レバーを引く。

タイヤ！コウカン！アメノハバキリ！

サウンドと同時にトライドロロンから蒼いタイヤが射出し、ドライブのボディのイチイバルタイヤと交換し、すると。

「何だ？タイヤから刀の刃が出てきた?!」

「英二、試しにノイズ共に向かって走ってみよう！」

ーブォー

タイヤから8本の刀の刃が出てきて、複数のノイズ共に向かって音速に走るドライブ、そして。

複数のノイズが切り裂きになり消滅。

「そうか、このシフトカーは、走るだけで、タイヤから刃が出てきて、ノイズを切り裂きにするのか！」

「やるもんだな、英二、ならば私も！」

翼はドライブに負けないでノイズを切り裂く。

「よし、次はこれだ！」

チェイサーはホルダーから緑色の鎌の形をしたシグナルバイクを出し、装填。

シグナルバイク！イガリマ！

サウンドと同時にチェイサーはシンゴウアックスを構え、シンゴウアックスの刃からイガリマの刃の光が現れ、複数のノイズ共に向かって振る。

ーブナー

そして、チェイサーのシンゴウアックスのひと振りで複数のノイズを消滅。

「おおー、そのアタシのシグナルバイク、すごいデス、使ってみたいデス！」
切歌はチェイサーの緑色のシグナルバイクを見て尊敬した。

「どりゃー!!」

「はあー!」

響とマリアはノイズ共を突き進んで飛び、ネフィリムウエルの所へ迎え撃つ。

「マリアさん、行きましょう!」

「ええ、今度こそ、終わらせるわ!」

「フッフ、果たして僕に勝てるかな?!」

「勝てるわ、私達は一人一人力を合わせてどんな苦難な敵に立ち向かい、乗り越えられる!」

「人と人が分かり会い、正しいことを見つけ、前に進み、立ち上がる!」

「そうさ、俺達は自分達なりの正しい道へ進み、間違った選択を選ばない!」

「和希さん、翼さん、クリスちゃん!!」

「英二、切歌、調!」

チェイサーとドライブ達はノイズ共を全滅し、響とマリアと合流。

「バカめ、そんな事で乗り越えられるのか?!」

「ああ、乗り越えられるさ、俺達2人は仮面ライダーとして!」

「これが私達のシンフォギアだあー!!」

響とマリアと翼とクリスと切歌と調は手を繋ぎ、金色と銀色の巨大なガントレットの手が現れ、6人を握るように包み、ネフィリムウエルの所まで猛スピードに突破、それと同時にチェイサーとドライブはマツハドライブ炎のスロットパネルを開け、ボタンを押し、叩き、シフトブレスのシフトカーを三回引き。

ヒツサツ! ガングニール! フルスロットル!

ヒツサツ! シエンシヨウジン! フルスロットル!

必殺音と同時にチェイサーとドライブはジャンプし、響達の合わせ技をネフィリムウエルの胴体のウエルの顔に貫き、ダブルライダーキックをした。

「バカな、僕が、こんな奴らに負けるのか?!」

「これで終わりだ、ウエルー!!」

チェイサーはシンゴウアックスを構え、銀色のシグナルバイクを装填。

ヒツサツ! アガートラム! マツテローヨ! イツテイーヨ!

「逝ってイーヨってきー!」

「やめろ、やめてくれ、小日向未来の事は謝る、だから殺さないでくれ!」

フルスロットル！

「ウエル、地獄に落ちろー!!」

チエイサーはアガートラムシグナルバイクを装填したシンゴウアックスをネフィリムウエルの胴体へぶん投げた。

「ギャー！」

ネフィリムウエルは光と、なって消滅し、ウエルも共に消滅した。

「地獄で自分のやったことを反省して詫びろ、ウエル！」

「ナイス、トライ！」

「やりましたね和希さん！」

「ああ、ありがとな、英二！」

——ドドドドド——

「何だ?!」

さっきの衝撃でフロンティアが崩壊し始まる。

「まずいぞ、なにか脱出する方法を探さねば！」

「そうだ、翼、ソロモンの杖を俺に渡してくれ！」

「何か考えたんですね、わかりました、あなたに掛けます！」

翼は回収したソロモンの杖をチエイサーに渡し、ブレイクガンナーでソロモンの杖を

粉々にし、そして次元の裂け目が現れ、見えたのは海辺だ。

「みんな、トライドロンとライドチェイサーに捕まれ、脱出するぞ！」

ベルトさんが忠告し、響と翼とクリスはドライブのトライドロンに捕まり、マリアと切歌と調はチェイサーのライドチェイサーに捕まり、全速力で脱出し、次元の扉が閉じ、変身を解除し、玄十郎と緒川達が脱出した響達の元へ駆けつけた。

「マムの優しい歌が、未来へ導かれる、ありがとう、お母さん！」

マリアは月のナスターシャ教授に感謝を告げた。

「マリアさん！」

響はガングニールのペンダントをマリアに渡そうとした。

「ガングニールは元々、君の大切な歌、その歌声が皆を明るくする、立花響、青島和希、君達に会えて大切なことをわかったわ、ありがとう！」

マリアは響と和希にお礼をし、すると。

ピピピ、ピピピ！

響の通信機から電話がなる。

「はい、もしもし、あおいさん？どうしたんですか?!」

「響ちゃん、いいお知らせよ、未来ちゃんの意識が今、戻ったわ！」

「ほんとですか？、良かった、ありがとうございます！」

あおいからの連絡で未来の意識が戻り、響は凄く喜んでた。

「でも、未来ちゃんは足が障害になって、しばらくは歩けない状態なの！」

「大丈夫です、あおいさん、未来の足が立つ日まで、私が支えます！」

「良かったな、立花、お見舞いに行こう！」

「響！」

和希は響に声をかける。

「ありがとう、さつきは励ましてくれて、後、暴走状態の俺を止めてくれて感謝するよ！」

和希は響に励ましの感謝や暴走状態の自分を止めてくれたこと頭下げてお礼をした。

「いや、そんな、そっちこそ、未来を助けてくれてありがとうございます、私は嬉しい

ですよ！」

響は和希に未来を救ったことを感謝した。

「玄十郎さん、ドクターウエルから回収しました、Lincolnのレシピチップです、これはあなた達が使ってください！」

英二は玄十郎にウエルから回収したLincolnのレシピチップを渡し、握手をした。

「うむ、ありがとう、協力に感謝するぞ！」

「響、目を閉じて！」

「はい、えっ?!」

和希は響を抱きしめて、目を閉じて、唇と唇を重ね合い、キスをし、響は目を開ける。

「なっ?!」

「オイオイ！」

クリス達は和希と響のキスを見て顔が赤くなり、顔を隠す。

「ゴメンな、キスをして、これは俺と未来の分のキスだ！」

「さあ、和希、タイムゲートが開いたよ、さあ、帰ろう！」

英二とベルトさんはトライドロンのタイムトラベルシステムを起動し、帰るように告げた。

「響、これを未来に渡してくれ！」

和希が響に渡したものはチェイスの写真が貼ってる運転免許証と形見のシグナルチェイサーを響に未来に渡してくれと告げ、ヘルメットを被り、ライドチェイサーに乗った。

「でも、これ、和希さんの大切な物ですよ、何で?!」

「お前が未来に渡してくれ、9年後の俺が君と未来を幸せにしてあげる！」

和希は響に9年後の自分が2人を幸せにする約束を告いだ。

「英二さん、10年後のアタシと調によりしくと伝えてほしいデス！」

「はい、現代に戻つたら言うつもりです！」

「響、みんな、じゃあな、元気でいろよ！」

英二と和希は響達に別れを告げ、トライドロンとライドチェイサーのエンジンをかけ、タイムトンネルに入り、現代に帰った。

そして現代、2035年11月

「それで、あなたは10年前の響にシグナルチェイサーとチェイスさんの写真が貼つてる免許証を渡して、別れを告いだのね！」

「ええ、未来に渡すように頼んで、去年、約束を果たして2人を幸せになることができましたよ！」

和希はスマホの写真を見て、和希と響と車椅子の未来の結婚写真や子供が生まれた写真が写つてた。

「それでも、変えられない未来だって、ありますよ！」

「青島、見ろ！」

翼は未来とチェイスの墓の地面の周りを教える。

「これは？日だまりの花?！」

和希はチェイスと未来の墓に生えた日だまりの花を見て涙を流す。

「うう、ありがとう、未来、俺、響と二人の子供の未来の為、頑張るよ、だから天国から俺達を見守ってくれ！」

和希は笑顔で涙を流し、空を見上げた。

「マリアさん、翼さん、今日は未来の為に来てくれてありがとうございます！」

「いいのよ、私達も、あなたに会えてホントに嬉しかったわ！」

和希はライドチェイサーに乗って、マリア達に感謝の言葉をした。

「青島、頑張るんだぞ！」

「はい、翼さん！」

「戻ったら、調や切歌の事、よろしくね！」

「はい！」

和希は翼とマリアにグータッチをし、英二達がいる新生特状課や妻の響と2人の子供がいる場所へ帰った。

最終回、未来の最後の約束、前編。

ネフィリムウエルを倒してから9年が過ぎ、彼女達は大人になった。

2034年、3月

私の名は小日向未来、年齢は24歳、今年で25歳になる！

9年前のフロンティア事変の翼さんとマリアさんのライブの時、ノイズに襲われそうな私を助けた仮面ライダーチェイサー、シェンショウジンをもとってウエルに操られ、響達を傷つけ、ギアを粉々にしてまでチェイサーは私を助けてくれた、現在足に障害があつて、歩けない車椅子生活になり、私が階段とか上れない方は、響や切歌ちゃんと調ちゃん、時々マリアさんと翼さんが手伝ってくれる、私を助けたチェイサーはどこに行つたのかな?!

車椅子の状態のロングヘアの黒髪で後ろにリボンをつけた女性、成長した小日向未来、未来が手に持つてるのは、チェイスのシグナルチェイサーとチェイスの写真が貼つてる運転免許証、それは9年前にチェイサーが現在に帰る前に響に渡し、未来に渡すように伝え、持った。

東京シティのマンション

2034年、3月、未来は響と同棲し、生活費は響が仕事を頑張っている、一年前の2033年、ノイズが全滅し、世界が安定になったが、新たな敵、ネオロイミュードが現れ、世界が困難になる、それに対抗するため、警視庁の新生署長に着任したブレングが新生特状課を設立し、ネオロイミュードの脅威と戦ってる。

「未来、頼まれたもの買ってきたよー!」

「ありがとう、響!」

未来に声をかけた女性の名は立花響、黄色い髪で、ロングヘアで両モミアゲのヘアピンが特徴の24歳、現在は人助けをするためにボランティア就職活動をしている。今日は響の仕事は休日、響は未来の手伝いをしていた、すると、

ピンポーン!

響と未来が住んでるマンションのチャイムが鳴り。

「はいはい!」

響がドアを開けると。

ガチャ!

「よお、響ちゃん!」

「おじゃましますデス!」

「お久しぶりです！」

「わあ、進之介さん、霧子さん、切歌ちゃん、調ちゃん、どうして?!」

「未来ちゃんの事、心配かなと思って来たのよ！」

「ああ、今日は切歌と調と俺の仕事もオフだから妻の霧子を連れてきたんだ！」

響と未来のマンションに訪れたのは進之介と妻の霧子と部下の切歌と調、金髪のロングヘアでバツテンのヘアピンが特徴の切歌と黒髪のロングヘアでピンクの眼鏡を掛けてる調、調と切歌は大学を卒業後、2人はブレン署長と進之介のお願いで、新生特状課にスカウトされ、仮面ライダードライブになる英二のサポートや、アシストをしている。

「これ、差し入れです！」

「わあ、ありがとう調ちゃん！」

未来は車椅子を動かして玄関に駆けつけてみると。

「進之介さん？霧子さん？切歌ちゃんと調ちゃん、来てたの?!」

「未来、進之介さんと切歌ちゃんと調ちゃん、今日は仕事休みだから来てくれたんだよ！」

「お邪魔していいかな?！」

「嬉しい、上がってください、今からお昼を作ります!」

「未来ちゃん、私も手伝うわ!」

「私も手伝います!」

進之介と霧子と切歌と調は靴を脱いでお邪魔し、未来と霧子と調はエプロンを掛け、お昼ごはんを作ってる。

響と切歌と進之介はテーブルに座って、話をする。

「あの時の事、心配してるのか?！」

「いえ、でも、ちよつと心配するんですよ、未来の事!」

進之介が響に話してるのは、一ヶ月前の話、2月の中旬の頃、響は仕事を早く終わって、家に帰り。

(ただいまー、未来、帰ってきたよ!)

響は玄関のドアを開けて家に入り、すると。

(未来?、未来?、しっかりして未来?!)

響は玄関に倒れた未来を起こしたが意識はない、響は急いでスマホを出し、救急車を呼び、未来を病院に搬送、響も付き添いにいく。

病院

救急車が病院につき、未来は検査室へ検査し、響は病院の中で座って待つ。

(響ちゃん!!)

病院へ駆けつけた進之介。

(進之介さん?、どうしてここに?!)

(響ちゃんが未来ちゃんを救急車に乗せてる所を見たから車で駆けつけて来たんだ!)

(進之介さん、未来が?、未来が?!)

響は不安そうな顔をして未来の事を心配する。

(ああ、何だか嫌な雰囲気になりそうだな!)

ガチャ

検査室のドアを開けた音が聞こえて先生が出てきて響と進之介の方へ歩く。

(先生? 未来はどうなったんですか?!)

響は未来の事が心配で慌てた声で先生に質問。

(そうですね、ここじゃ驚くから検査室へ行くのか、未来ちゃんの事を話そう!)

(俺も一緒に行つていいですか?!)

(いいですよ!)

響と進之介は先生の指示で検査室へ行き、椅子に座り、先生の話を聞くようにキチンとした。

(先生、未来ちゃんの容態はどうなんですか?!)

進之介は、はきはきとした声で未来の容態を先生に質問。

(えーと、一応、検査はしたんですが、レントゲンの方を見てください!)

進之介と響は未来のレントゲン写真を見て先生が言う。

(心臓に黒い影が見えて、これは、心臓病です、それで車椅子から倒れて意識がないんですよ!)

(それで、未来ちゃんは何年生きられるんですか?!)

進之介は先生に未来は何年生きれるかを質問。

(そうですね?、これは私達でも難しい手術でして、余命は9ヶ月です!)

先生は響と進之介に未来の余命宣告は残り9ヶ月をはつきりと告ぐ。

(未来が、残り9ヶ月で死ぬ?、そんな!)

(響ちゃん、落ち着いて、先生の話を最後まで聞こう!)

進之介は余命宣告の未来のショックを受けた響をささえ、先生の話最後まで聞くようにする。

(そうですね、二日間だけ入院させ、退院日には心臓病の薬を出しておきます!)

(よろしくお願いします!!)

進之介と響は検査室を出て、病院を出て、外で並べて歩き、進之介はスマホを出して電話をする。

(はい、もしもし、小日向さん、少し、家にお伺いして宜しいですか?、未来ちゃんの事で話したいんですが?、わかりました、すぐ伺いに行きます!)

進之介は未来の両親に電話をして切る。

(未来のご両親に電話してたんですか?!)

(ああ、未来ちゃんの病気の事を話さないといけないからな、先に響ちゃんを家まで車で送るよ!)

(いえ、進之介さんも忙しいですよ、一人で帰れます!)

(そうか、もし何かあったら切歌と調に連絡するんだぞ、じゃあな!)

(進之介さん、今日はありがとうございます!)

進之介は響と離れ、車に乗って未来の両親がいる実家まで走る。

そして、現在。

「未来ちゃんのご両親には未来ちゃんの病気の事、説明してお母さん泣いてて、お父さんが支えてる!」

「余命までに未来の事、幸せにしないと!」

一ヶ月前を振り返り、二日間がたち、未来は退院し、響と家に帰り、進之介がお邪魔し、未来の前で未来の病気の事や余命の話告ぎ、帰る。

(いや、こんなの嘘よ、私があと9ヶ月しか生きられないなんて、何で? 私は響の側にいて幸せにしたい、結婚したい、もつともつと一緒にいたいよ!)

(未来!)

部屋で未来の泣き叫びが聞こえ、響は黙って心配する。

「そうだな、響ちゃん、余命まで、未来ちゃんの事、もつともつと一緒にいろよ!」

「はい、進之介さん!」

「アアアア、未来さんのピアノに置いてあるあれは何デスカ?!」

切歌は未来のピアノに置いてる紫のシグナルバイクと不気味な笑顔の青年の写真が貼ってる運転免許に気づく。

「響ちゃん、未来ちゃんのピアノの置いてるシグナルチェイサーとチェイスの免許証、誰から貰ったんだ?!」

進之介はピアノに置いてるシグナルチェイサーとチェイスの免許証を響に言い。

「あれは、9年前に和希さんという人が未来へ帰る前に私が未来に渡してと伝えて貰ったものですよ!」

と響が語った。

(待てよ、シグナルチェイサーは和希が持つてるはずじゃ？うーん!!)

進之介は頭の中で推理をし、それを解ける。

「繋がった、10年後の和希の正体が解った!」

「進之介さん?どこ行くのですか?!」

「ちよつと廊下の方へ行つてくる、電話したい人がいるからな!」

進之介は廊下へ行き、スマホを取り出して電話をする、電話相手は和希の名前が書いたアドレス。

一方、港。

「うおー!」

「素早いな、こいつがネオロイミュードか?!」

「ひやははは、俺の早さについていけるか?!」

ネオロイミュードの音速攻撃に苦戦する、仮面ライダーチェイサー。

「ならば、これならどうだ!」

チェイサーは黄色いシグナルバイクを出し、それをマツハドライダーに装填。

シグナルバイク!トマーレ!

「ひやははは、あれ?動きが止まった?!」

シグナルバイク、トマーレの力で相手の動きが止まる。

「やっぱりな、音速の敵に対抗は、こいつならいける！」

チエイサーはシンゴウアックスを出し、動きが止まったネオロイミュードに目掛けて振る。

ーブーンー

「ぐは、くそ、動けねえ！」

「今だ！」

チエイサーは動きが止まったネオロイミュードの際にシンゴウアックスにシグナルチエイサーを装填し、ボタンを押し。

ヒツサツ！マツテローヨ！

シンゴウアックスのイツテイーヨの間にネオロイミュードにパンチをしまくり、そして。

イツテイーヨ！

シンゴウアックスの信号マークが青に変わり、チエイサーはシンゴウアックスを持ってネオロイミュードに思いつきり振った。

フルスロットル！

「おりゃー！」

「ギャアアアア！」

ードーンー

ネオロイミュードがチェイサーのシンゴウアックスの攻撃と同時に爆破、チェイサーの勝利。

オツカーレ！

変身を解除し、パトカーの方へ向かって歩く和希。

「よくやったぞ、和希！」

「さすがは、チェイスを受け継ぎ、剛が認めた男だな！」

「越田警部、ハート警部、ありがとうございませす！」

和希と話してるこの二人は、左の男は越田源八朗警部、元特状課の刑事で、今は本庁の警部、りんなど結婚して、相棒と協力して事件の活躍をした。右の赤いロングコートを羽織った男はハート、ロイミュードである、2015年にあつた進之介とメディックと共に第二のグローバルフリーズを阻止した後、進之介と生身で対決し、コアもろとも消滅、ネオロイミュード対策の為、りんがもう一つのプロトロイミュードにハートのデータを注ぎ込み、ハート専用のドライブドライバーを製造し、正義のロイミュードとして復活、仮面ライダーハートとして戦う。

「ハート警部、越田警部、犯人を連行しました！」

「よし、そいつらを本庁まで連れていけ！」

「了解しました！」

越田警部とハート警部の命令で警察官達は犯人をパトカーに乗せて本庁まで連行。

「よし、事件も終わったし、ハート、和希、昼飯に行くか？奢るぜ！」

「ああ、ゴチになるぞ、源さん！」

ピッピッピッ！

「越田警部、ハート警部、ちよつと電話です！」

和希はスマホを出し、電話に出る、連絡相手は泊進之介からだった。

「はい、もしもし、進之介警部、どうしたんですか、電話してきて?！」

「和希、昼飯はまだか?！」

「ええ、まだなんですけど、どうしたんですか?！」

「今すぐ俺がいる場所まで行ってくれ、昼飯を用意してある！」

「ええー?、今から越田警部とハート警部と一緒に昼飯を食べに行くけど?！」

「それはキャンセルしてくれ、とにかく来てくれ！」

ピッ！

和希は電話を切り、ライドチェイサーに乗る。

「オイ、和希、どこ行くんだ?！」

「すみません越田警部、進之介警部からの連絡で来てと言われたから行ってきます、昼飯はハート警部と行ってください！」

和希はライドチェイサーを起動して、進之介がいるところへ向かった。

「おうよ、じゃあまた今度な、はあー、進之介の奴、アイツに連絡して何を考えてんだ、ハート、飯食いに行くぞー！」

「ああ、店は源さんに任せるぞー！」

越田警部はハートを連れて昼飯に行った。

東京シティのマンション

和希は進之介からの連絡で教えた場所に行き、ライドチェイサーを駐車場に置き、進之介の方へ向かう。

「おっ、和希、来たか！」

進之介は玄関で待った。

「進之介警部、どういう事ですか？俺の所に連絡して?!」

和希は進之介に連絡したことを疑問に答える。

「まあまあ、とにかく中にはいれ、昼飯食ってから後で話すよ!」

進之介は和希を連れて中に入り、響達のいるリビングへ向かった。

「みんな、響ちゃん、未来ちゃん、お待たせ!」

「おっ、来たデスか!」

「えっ? ええー?!」

響は進之介が連れてきた青年に驚く。

「響? どうしたのそんなに驚いて!」

未来は車椅子を動かして響の方へかけつける。

「そういうえば、未来ちゃんと響ちゃんは、はじめましてかな、こいつは青島和希、俺と切歌と調と同じ、新生特状課に配属した、二代目仮面ライダーチェイサーだ!」

進之介は響と未来に和希の事を自己紹介する。

（ねえ、未来? あの人って、まさか?!）

（まだ解らない、でも、9年前に現れたあの人かな?!）

響と未来は小さい声で和希の事を話した。

「さあ、出来たわよ、今日は調ちゃん和私と未来ちゃんが作った料理よ！」

霧子と調は出来上がった料理を運び、切歌のいるテーブルやらへ置く。

「今日の料理は霧子さんと未来さんと一緒に作った料理、クリームパスタです！」

「ヤッホー、調と霧子さんと未来さんの料理です！」

調は霧子と未来が作った料理の名前を言い、切歌はそれを見て喜んだ。

「さて、料理も来たし、和希、行こうぜ！」

「それじゃ、お言葉に甘えていただきます！」

和希は進之介達のいるテーブルに座り、フォークを持ち、出来上がったクリームパスタを食する。

「うまいな、このパスタ、具材は舞茸とベーコンと玉ねぎか！」

「ええ、調ちゃんが差し入れついでに持ってきたものなの！」

「和希さんに合いますかな?!」

「いや、十分に足りるよ、ありがとう！」

和希は調と未来と霧子が作ったクリームパスタや具材を誉め、調と霧子と未来は喜んでた。

「未来、ありがとう、俺も響も嬉しいよ！」

和希は笑った笑顔で未来に感謝の言葉をし、すると。

「えっ？私、何だか顔が赤くなった！」

ポ—

未来は顔が赤くなり、頭が沸騰するように吹いた。

「デデデ、未来さんが赤くなって沸騰したデス?!」

みんなは話をしながら食事を終え、切歌と響は食べ終わった食器を運び、霧子と調と未来は洗い物をする、未来は顔が真っ赤になりながら洗ってる。

「じゃあ進之介さん達、俺もそろそろ仕事に戻ります！」

「和希、ちよつと待ってくれ、戻る前にちよつと話したいこと事があるんだ！」

進之介は和希を廊下に連れて話をする。

「進之介さん？どうしたんですか？」

「実はお前をここに呼び出した理由は頼みたいことがあるんだ！」

進之介は和希に頼みたいことを話す。

「和希、響と未来の恋人になってくれ！」

進之介は和希に響と未来の恋人になってくれと告げ。

「えっ?!」

和希はえっ?と言う。

最終回、未来の最後の約束、中編。

「えっ？、進之介警部、どういう事ですか、二人の恋人のなれと?!」

和希は進之介から響と未来の恋人になれと言い、理由を言う。

「実は、一ヶ月前の2月に未来ちゃんが病気を発症して、残り9ヶ月ほど長く生きられないんだ、だからお前をここに呼び出して、伝えたんだ!」

進之介は和希に未来の病気の話を伝え。

「進之介警部、さっきの話の事を少し考えさせてください、あの二人とは初めて会ったばかりですが、未来という彼女の病の話の話を聞くと自分自身の事を迷ってしまいます!」
和希は進之介にさっきの話の事を少し考えさせてくださいを告げ、響と未来のマンションを出て、駐車場に置いてるライドチェイサーを起動して、新生特状課に戻った。

「和希、迷っているのか?!」

進之介は和希の事を心配する。

夜

和希は夕方六時半に新生特状課の仕事を終え、買い物をし、自宅のマンションに帰る。夕飯を終え、風呂に入り、夜23時にベッドに入り寝る準備をしていた。

(進之介さんのさっきの話、どう悩むのか?!)

和希は寝ながら響と未来の事を悩む。

(そうだな、それまで、じっくり考えないとないとな!)

和希は目をつぶり、眠りについた。

次の日!

「うーん、どうしたらいいんだ?!」

新生特状課の事務所の自分の机で悩んでしまう和希。

「デデデス?、和希さん、どうしたんデスか?調!」

「そうだね切ちゃん、何だか悩み事があつたよ!」

切歌と調は悩む顔をした和希を見る。

「よお、切歌ちゃん、調ちゃん!」

「源さん、ハートさん、来たんですか?!」

「おうよ、事件が今のところ起きてないからな、ハートと一緒にここを立ち寄ってきたんだ!」

「頑張ってるな、切歌、調!」

「ハートさんも正義のロイミュード仮面ライダー頑張ってるデスよ!」

「ありがとう、切歌達の誉め言葉ですっかり感謝してるよ!」

切歌はハートと一緒に事件や仕事の話や感謝の誉め言葉の話をし。

「ブレン署長、ちよつと屋上に行ってきます!」

和希はブレン署長に屋上に行つてくると告げ、事務所を出た。

「あいつ、なんか悩んでるのか?!」

「源さん、ちよつと追いかけていこう!」

「てっ? おい、ハート、どこに行く、調ちゃん、切歌ちゃん、俺、ちよつとあいつについてくるわ、今度は飲みに行こうな、女房と相棒連れて、じゃあ!」

越田警部は切歌と調から離れ、ハートと一緒に屋上へ尾行する。

新生特状課屋上

「はあー！」

和希は一人でため息をし、一人で悩んでいた。

「よお！」

「ハート警部?!」

ハートは一人で和希のいる屋上で声をかける。

「なんか悩み事か?、俺が質問するぞ！」

「実は！」

和希はハート警部に悩み事を伝える。

「そうか、泊進之介からの話で、立花響と小日向未来の恋人になれと悩んでいたのか
！」

「はい、昨日、俺が新生特状課に戻る前に進之介さんが俺に話をして、実は響ちゃんの
幼なじみの未来ちゃんが、11月になったら死ぬんだ！」

「小日向未来が死ぬ?どうしたんだ?!」

ハートは未来が死ぬことを少し驚く。

「実は、進之介さんからの話を聞いて、病院で話を聞いたら、医師でも難しい手術で重
い心臓病なんです！」

和希はハートに未来の病名を教え、ちよつと涙を流しハートは。

「和希、頼む、小日向未来と立花響の恋人になるんだ！」

「ハート警部?!」

ハートは和希に未来と響の恋人になってくれと説得するために正座をし、強く土下座をした。

「ハート警部? 止めてください、そんなところで土下座をして、冗談は止めてください！」

「冗談じゃない、俺は本気だ、俺は19年前、あいつを、泊進之介と対決して、人を守る大切さを心のそこから沸き上がった、だから俺は蘇って、源さんの最高の相棒として、泊進之介と共に事件や仮面ライダーとして生きてんだ、泊は、お前のために言ってるんだ、お前だつてそうだろ?、お前が19年前にアイツを、チエイスがお前の両親と共に救えた気持ちや、チエイスを受け継いで仮面ライダーになれたことを！」

ハートは土下座しながら和希に背中を押すような大声を出し、自分の事や、散ったチエイスの事を語る。

「ハート警部、俺は！」

ピピピピピピ

和希はスマホを出し、画面を見る、連絡相手は進之介警部から。

「はい、もしもし、進之介警部、どうしたんですか?!」

「和希、大変だ、犯人がネオロイミュードを操って東京シティ街周辺を襲撃してる、急いでくれ！」

「わかりました、すぐいきます！」

和希は進之介警部からの連絡を終え、現場に駆けつけ。

「ハート警部、背中を押してくれて、ありがとうございました、俺は覚悟を決めました！」

「そうか、頑張れよ、チェイスを受け継ぐ男よ！」

和希はハートに感謝を告げ、屋上を出て、ライドチェイサーに乗り、現場に向かった。

「ハート、言い心がけだぞ、ううう、俺は感動してたぜ、うわーん！」

「源さん！」

源八朗はさつき、ハートが和希の背中を押すような声を聞いて大量の涙が出て、ハンカチでふく。

「源さん、ありがとう！」

ハートは源八朗にありがとうの感謝を告ぐ。

東京シテイの街周辺

三台のパトカーが置き、警官隊達と進之介がネオロイミュードの討伐をする。

「よし、みんなは犯人を頼む、俺はネオロイミュードの討伐をやる！」

「泊警部、気を付けてください！」

「ああ、任せろ、ベルトさんが目覚めたばかりで使うわけにはいかない、ならば！」

進之介はマツハドライバー炎を腰につけ、デッドヒートシフトカーを出し、装填。

シグナルバイク！シフトカー！ライダー！

「変身！」

デッドヒート！

進之介は変身ポーズをし、スロットパネルを押し、赤い4つのタイヤが進之介に包み、装着、そう、仮面ライダードライブデッドヒートマットハドライダー装備である。

「おつ、ロイミュードを全て倒した噂の仮面ライダーか、ならばこつちも本気で行くぜ、ぬおー！」

ネオロイミュードが力を発揮し、姿が変わる、両腕はワニのような顔になり、顔は迫力的なクロコダイルに変わった。

「俺はクロコダイルネオロイミュード、俺はどんなものでも噛みつくぜー！」

「姿が変わった？、行くぞ、ネオロイミュード！」

ドライブデッドヒートはクロコダイルネオロイミュードと迫力なバトルをし、立ち向かい。

「ひやははは、これでも食らえー！」

クロコダイルネオロイミュードはワニのような顔の両腕から針のような物を発射し、ドライブデッドヒートに当たる。

「くっ、針攻撃？ならばー！」

ドライブはホルダーから紫のシフトカーを出し、マツハドライブバーに装填。

シフトカー！タイヤコウカン！トバース！

ミッドナイトシャドーを装填し、ドライブデッドヒートのタイヤが紫の手裏剣に変わり、クロコダイルネオロイミュードにめがけて射出。

「うわっ、やりやがったな、おっ?!」

クロコダイルネオロイミュードは逃げ遅れた車椅子姿の未来を見かけ。

「逃げ遅れた奴がいたか、よーし!」

クロコダイルネオロイミュードはジャンプして逃げ遅れた未来に向かい。

「ネオロイミュード?どこに向かう?あれは、未来ちゃん?、マズイ!」

ドライブデッドヒートはデッドヒートシフトカーを装填したままのマツハドライブバーのシフトパネルを開き、ボタンを4回押してパネルを閉める。

バースト!キュウニ!デッドヒート!

ドライブの体から沸騰するように沸き上がり、未来の方へ向かってダッシュする。

「ひやははは、喰ってやるぜ!」

クロコダイルネオロイミュードは未来の方へ着き、右腕の方を構え。

「響、助けて！」

未来が叫んでも響は来ない、響は仕事で電話に出られない状態だった。

「ひやは、いただきます！」

「きゃー！」

「ブーン」

ドン

「えっ?、ギャアアアア！」

未来の叫びでライドチェイサーがクロコダイルネオロイミュードにぶつけ、ぶっ飛び、未来の方へ駆けつけ、ヘルメットを外す。

「大丈夫か?、未来ちゃん！」

「えっ?、ありがとうございます！」

和希は未来の心配をし、未来は感謝をした。

「和希、遅いぞ！」

「すみません進之介警部！」

和希はドライブデッドヒートの進之介に遅れたことを話した。

「テメー、よくも俺の腕に傷つけやがって、許せねえ！」

クロコダイルネオロイミュードは怒り爆発し、沸騰。

「お前、響ちゃんの幼なじみの未来ちゃんを脅かそうとするとは、許さん！」

和希はマツハドライダー炎を腰につけ、シグナルチェイサーを装填。

シグナルバイク！ライダー！チェイサー！

「変身！！」

和希は仮面ライダーチェイサーに変身し、クロコダイルネオロイミュードと対決する。

（やっぱり、違うけど、9年前の翼さんとマリアさんのライブにノイズから私を助けたあの人に似てる！）

未来は9年前に逃げ遅れた自分を救ったチェイサーの面影を思い出す。

「仮面ライダー、テメーはぶっ潰す！」

「進之介警部、未来ちゃんを安全な所へお願いします！」

「わかった、気を付けろよ和希！」

ドライブデッドヒートは車椅子に乗ってる未来を安全な所まで連れて行き、チェイサーはシンゴウアックスを構え、クロコダイルネオロイミュードと対決。

ーブナー

「ぐはっ！」

「チクシヨウ、これでも食らいやがれ！」

クロコダイルネオロイミュードはワニのような顔の両腕の歯の針攻撃でチエイサーに命中。

「針攻撃か、ならば！」

チエイサーはホルダーから青いシグナルバイクを出し、マツハドライバーに装填。

シグナルバイク！カクサーン！

チエイサーはカクサーンを使って、ブレイクガンナーの銃弾の雨が敵に命中。

「ぐはっ、チクシヨウ、お前をボコボコにしてやるぜ！」

クロコダイルネオロイミュードはワニのような顔の両腕のアゴを上げ、チエイサーに接近しようとする。

「だったらこれだ！」

チエイサーは次に使うシグナルバイクを出す、サメの顔の形したピンクのシグナルバ

イクをドライバーに装填。

シグナルバイク！キケーン！

クロコダイルネオロイミュード近くにサメの顔のピンクのミサイルが現れ、近づく。

「やばっ、動いたら爆発する、それがどうした！」

ードーンー

「うわっ！」

クロコダイルネオロイミュードはキケーンミサイルに命中され、倒れる！

「よし、最後にこれだー！」

和希はデッドヒートシフトカーを出し、マツハドライダーに装填。

シグナルバイク！シフトカー！ライダー！デッドヒート！

赤い4つのタイヤがチェイサーに包み、装備、そして、ボディはデッドヒートの赤、顔はチェイサー、そう仮面ライダーチェイサーデッドヒートの本来の姿だ。

「げげ、今度は赤になっただど?!」

チェイサーはデッドヒートシフトカーを装填したままのドライバーのスロットパネルを開き、ボタンを4回押す。

バースト！キュウニ！デッドヒート！

チェイサーの体から赤い沸騰が出て、シンゴウアックスを持つ。

「うおー！」

ーブーンー

チェイサーは猛スピードで、クロコダイルネオロイミュードに攻撃。

「やばい、やられるー！」

クロコダイルネオロイミュードはデッドヒートになったチェイサーに苦戦し、逃げようとした。

「逃がさん、とどめだー！」

チェイサーはドライブバーのスロットパネルをもう一度開き、ボタンを押した。

ヒツサツ！バースト！フルスロットル！

必殺技音がなり、チェイサーはジャンプして逃げようとしたクロコダイルネオロイミュードの向けてライダーキックする。

「うおおおお!!」

ドーン

「ギャアアア!!」

チェイサーのライダーキックは命中し、ネオロイミュードのコアが消滅。
オツカーレ!

変身を解除し、進之介と未来の所へ駆けつける。

「ナイスだ、いい戦いだぞ!」

「進之介警部、未来ちゃんの事、ありがとうございます!」

「和希、答えは見つかったのか?!」

「はい、ここに来る前にハート警部に背中を押してくれましたから今ならはつきり言えます!」

和希は進之介と未来の前をしつかり見る。

「俺、響ちゃんと未来ちゃんが好きだ、俺は、未来ちゃんの余命まで2人を幸せになることを誓う!!」

和希は迷わずはつきり告白を言い、そして!

「ひっく、和希さん、私と響でいいの?、でも私は歩けない足で?!」

未来は涙ぐみながら和希に響の事や自分が歩けない足の事を話し。

「いいも、悪いも関係ない、響と未来は俺にとっての太陽と日だまりなんだ!」

和希は未来に言い言葉を伝える。

「でも、どうして和希さんは私と響の事が好きなの?！」

「実は、昨日の夜、進之介警部の言葉で悩みながら寝て、夢の中で、もう一人の俺が現れたんだ!」

和希は昨日、夢の中でもう一人の自分が現れた事を話し。

（あんたは? 誰だ?!）

（俺は一年後のお前だ!）

（もう一人の俺?!）

もう一人の自分が名前を語り、和希はちよつと驚く。

（そのもう一人の俺が何のようだ?!）

和希は一年後の自分に何か質問する。

（和希、迷わず進め、お前が響と未来を幸せにしてやってくれ、彼女の、小日向未来の最後の願いだ!）

一年後の和希は自分に迷わず二人を幸せにしてやってくれと語り、和希は。

（わかったよ、俺、覚悟を決めたよ、響と未来を俺が一生幸せにするさー！）

（そうか、お前なら二人を幸せになれる、未来の余命まで守ってやってくれ、家族を。）

一年後の和希に覚悟を決めて一生幸せにするさを語り、一年後の和希は、ほっとして夢の中から去った。

「それで和希さん、一年後の和希さんに私の余命まで迷わず響と私を幸せにしてくださいと伝えて、決めたんだね、実は私も響も、同じ夢を見たの、私には9年前の事を謝って、響にも謝ったの！」

「未来ちゃんも響ちゃんと一年後の俺の夢を見たのか?!」

未来も響と同じ一年後の和希の夢を見たと言い、ちよつと驚く。

ピピピピピピ

和希と未来が話してる時、進之介のスマホがなり、電話にでる。

「はい、泊です、どうした?!」

「泊警部、犯人が取り逃がしましたが、切歌さんと調さんが通り回った時に取り押さえました！」

「よし、犯人をそのまま連行しろ、俺もすぐ駆けつける！」

「すまない、未来ちゃん、家まで送れないが和希がかわりについていってあげるよ、じゃあ、和希、頼むぞ！」

進之介は電話を切り、和希と未来に別れを告げ、パトカーに向かつて走った。

「未来ちゃん、家までついていってあげるよ！」

「ありがとう！」

「でも俺、ライドチェイサーで来たから押していくよ！」

未来は電動製の車椅子を動かし、家まで行き、それと同時に和希はライドチェイサーを押していった。

「ねえ、和希さん！」

「何だ？ 未来ちゃん?!」

「和希さんはどうして仮面ライダーチェイサーになったの?!」

未来は電動車椅子を動かしながら、和希に仮面ライダーチェイサーにどうしてなったのを質問し。

「そうだね、19年前にあった新宿区内のロイミュード襲撃で、俺の両親と俺の命をチエイイスさんが救ってくれたんだ！」

和希は未来に19年前にあった新宿区内のロイミュード襲撃で自分の両親と自分の命をチエイイスに救ってくれた事を話した。

「それでチエイイスさんという人に憧れて仮面ライダーチエイサーになれたんだね！」

「ああ、20歳の時に警視庁の試験を受けて、見事合格したんだ、進之介警部や剛さんが不安していた俺の背中を押してくれたんだよ！」

「和希さんも頑張ってるね、あつ、ふらわーのお好み焼き屋がある、行ってみる?!」

「そうだな、もうじき昼だからな、行くか！」

未来はふらわーのお好み焼き屋の看板を見つけ、和希と一緒に中に入り。

「いらつしやい、あら？未来ちゃん、久しぶり、綺麗ね、あら？そちらの隣は彼氏さん?!」

「あつ、はい、初めまして、未来ちゃんと響ちゃんとの恋人になりました、青島和希です！」

和希はおばちゃんの返事に聞こえ、すぐ礼儀正しい挨拶をして返事をする。

「響ちゃんは仕事?!」

「はい、今日休みになれたら一緒に行くこうと思って！」

「あらら、そちらの人は何の仕事してるの?!」

「あつ、はい、警察の仕事をしています!」

「あら、立派な人だねー!」

おぼちゃんは今和希に何の仕事をしているかを声掛けて言った。

「さあ、何がいい?!」

「私はミックスで!」

「俺は、そうだな、すじこんを1つでお願いします!」

未来はミックス、和希はすじこんを頼み、焼いてる間は未来と話をする。

「こここのふらわーのお好み焼きは美味しいよ、学生時代、響と弓美ちゃん達三人と一緒に帰りにたまに行ってるの!」

「へー、そうなんだ、今度は進之介警部を誘って行くか!」
すると。

「おば様、1人お願いします!」

「あいよ!」

ブレンが入ってきた。

「おや、和希君、君もここに来てたのか?!」

「えっ? ブレン署長、何で来たのですか?!」

「決まっていますよ、私もお昼ですのでたまにはこういうところもいいかと！」

ブレンは和希の隣に座る。

「あの、どなたですか?!」

「おや、はじめまして、私は新生特状課の署長のブレンです！」
ピカリン！

ブレンは未来に自己紹介し、頭がピカリンと輝く。

「つまり、和希さんと進之介さんが働いてる警察なんですね?!」

「ご名答、そして私も和希君と同じ仮面ライダーです！」

ブレンは未来に自分も和希と同じ仮面ライダーと言う。

「お客さん、何がいい?!」

「そうですね、イカとえびをお願いします！」

「あいよ！」

ブレンはイカとえびを頼み、じつくりと待つ。

「和希君、現場に行く前に屋上に行つて、何をしてたんですか?、ハートと越田警部も君の事、見てきましたか?!」

「まあ、ちよつと悩みごとだけですよ！」

ブレンは和希に屋上で何をしてたかを問い、和希はちよつと悩みごとだけですよと誤魔化する。

「お待ちどうさん、未来ちゃんはミックスで、あんたはすじこんよ、ゆつくりしていきな！」

「ありがとうございます、いただきます!!」

「あつ!!」

ポツ

和希と未来は同時にいただきますを言い、頬が赤くなる!

「うまいな、店でお好み焼きを食べるのは初めてですよ!」

「ほほほ、そうかい、良かったよ、うちのお好み焼きは秘伝の味だよ、響ちゃんも大量に食べてたからね!」

和希はすじこんお好み焼きを食べ、おばちゃんにうまいと誉めた。

「あいよ、メガネのハゲさんのイカとえび、お待ちどうさん!」

「それでは、いただきます!」

ブレンはすかさず箸を持って注文したお好み焼きを食べる。

「むつ、うまい、お好み焼きの生地やさつくり感と具材のキャベツやイカとえびの食感がまさにトレビアンですよ!」

ブレンはイカとえびのお好み焼きを食べて、昇天しそうな風に言う。
数十分後、お好み焼きを食べて、和希が二人分の会計を払って店を出る和希と未来、ブレンはまだ店で食べていた。

響と未来の暮らしているマンションについて和希はライドチェイサーを駐車場に置いて、未来と一緒にエレベーターに乗り、扉の前に行き、未来がカギを開け、扉を開けて中に入り、和希が未来の靴をぬがして、未来を廊下に支える。

「じゃあ、俺は仕事があるから戻るな、じゃあ！」

和希は響と未来のマンションを出ようとする。

「待って、和希君！」

「未来ちゃん？どうしたんだ?！」

未来は帰ろうとした和希の右袖を掴み、和希君と言う。

「和希君、今日は何時に終わるの?！」

「そうだな、今日は夕方6時半には終わるけど、どうした?！」

「せっかく私と響の恋人になったから、響を呼んで今日の夜、ホテルで一緒に食事に行きたいけど、いい?、お金を払ってくれたお礼もかねて！」

未来は和希に仕事が終わったら響と一緒に食事に行こうと誘い。

「いいよ、仕事が終わったらなるべく早く来るよ！」

和希はいいよと答えた。

「よかった、待ってるね！」

「ああ！」

和希は扉を閉め、駐車場に置いてるライドチェイサーに乗って。新生特状課に戻り、未来はスマホを出して、響に電話をする。

「もしもし？響、今日は何時に帰れるの?!」

「今日は4時半に帰れるけど、どうしたの?!」

「今日、ホテルで食事に行こうと思ってるの？いい?!」

「いいけど、何で?!」

「ふふふ、実は響と私にサプライズがあるの！」

「サプライズ?!」

未来はふふふと笑って響にサプライズを伝える。

新生特状課事務所

「じゃあブレン署長、お先です！」

和希はブレンに挨拶をし、急ぎ歩きで帰る。

「和希さん、急ぎ歩きして、どうしたデス?!」

「そういえば、進之介さんも早めに仕事をきって帰ったわよ、切ちゃん！」

調と切歌は仕事を終わって話をしながら帰る準備をする。

「もしかしたら、切歌君、調君、帰りにホテルで食事に行きましようか？今日は私が奢りますよ！」

ブレンは切歌と調に食事に行こうと誘い、二人は。

「いいデスカ？、ゴチになるデス！」

「では、お言葉に甘えて、いただきます！」

「では、行きましよう、私が車を運転します！」

ブレンは切歌と調を連れて、車に乗ってホテルに向かった。

そして夜7時、ホテルの高級レストラン

三人が座る席を確保して待つてる、響と未来、響と未来は行く前に化粧と綺麗なドレスをし、響は黄色い露出が少ないドレスを着て、未来は紫の露出の少ないドレスを着ていった、車椅子状態の未来を着替えさせるのは響がしていた。

「ねえ、未来、私と未来にサプライズって誰なの?！」

「ふふふ、後、少ししたら来るわよ！」

すると。

「はあはあ、ごめん待った?!」

和希は私服姿で紫のジャケットで来た。

「和希君、待ってたよ!」

「未来、サプライズって和希君?!」

「そうよ、皆さん!」

「[[[[[[じゃーんデス!]]]]]]」

未来の掛け声で現れた進之介と霧子と英二とブレンと切歌と調。

「進之介警部?霧子さん達、どうしてここに?!」

和希は進之介達がなぜ来たかを理由を言い。

「どーせサプライズならこの方が楽しむかと、ブレン署長とベルトさんが企画してたんだ!」

進之介は和希にベルトさんとブレンの企画を話した。

「進之介警部が早く帰ってきた理由は部下の和希君と知り合いの響ちゃんと未来ちゃんを祝うためですよ!」

「ハハハ、驚かせようと、進之介が私とブレンに頼んで考えたんだよ!」

「よし、じゃあ、和希と響ちゃんと未来ちゃんの恋人誕生の記念を祝って!」

「[[[[[[[[乾杯!]]]]]]]]」

進之介は皆にグラスを持って、乾杯の号令をした。

ブレンは高級料理を食べながら切歌と調とワインを飲み、進之介は霧子と英二と食事をし、ベルトさんは皆の光景を見ていた。

「なあ、未来、響、一緒にワインを飲もうか?!」

和希は料理をゆつくり食べながら敬語を言い、響と未来と一緒にワインを飲もうと声を掛ける。

「うん、いいよ、私と未来はちよつとだけお願い!」

響は和希に自分と未来の飲む方をちよつとだけとお願いし、和希は2人のグラスにちよつと注ぎ、和希は普通に注ぎ、飲む。

数時間後、ホテルの料理を食べ終え、進之介と霧子と英二とベルトさんは家に帰り、切歌と調は自宅マンションに帰り、ブレンは新生特状課に帰り、和希は響と未来をマンションまで送り、帰ろうとすると。

「和希君!」

響と未来は和希の服の袖を掴む。

「今日は遅いから泊まって!」

響は和希に泊まってと声を掛け。

「いいのか?俺が泊まって大丈夫か?!」

「いいのよ、私と響しか住んでないから大丈夫！」

「じゃあ、遠慮なく！」

和希は未来の許可をもらって中に入り、靴を脱いだ。

「和希君、お風呂三人で一緒に入る?！」

響は和希にお風呂三人で一緒に入ると声を掛け。

「いや、響と未来は先に入ってくれ、俺は二人が上がったら入るから！」

「うん、わかった、終わったら声を掛けるね！」

響と未来はひとまず先に風呂に入りに行き、響は車椅子の未来をバスルームに連れていき、和希は待つてる間は座って待つ。

「あれ、この写真は?！」

和希は写真立てに写ってる小さい頃の未来と響、チエイスの写真に気付き。

「チエイスさん?、じゃああの子達は?響と未来?！」

「和希くん、お願い、こっちに来て、未来をパジャマに着替えさせて、車椅子に乗せるの手伝って！」

「わかった、すぐ向かう！」

和希は響と未来がいるバスルームに行き、響と未来はパジャマに着替え、和希は顔の頬を赤くなりながら未来をお姫様抱っこに抱え車椅子に乗せる。

「ありがとう和希君、私と響はリビングで待つてるね！」

未来は車椅子を動かしながら響とリビングに向かい、その間、和希はバスルームで風呂に入る。

数十分後、風呂を上がった和希は体をふき、着ていた自分の服を着て、バスルームを出て、リビングに向かう。

「あつ、和希君、うわー！」

ツルツ

響は立ち、床に滑り。

「響?!」

和希はすかさず響にダイビング、目を開けると、響を押し倒して、唇と唇を重ねた。
いた。

「えっ?、ごめん響、大丈夫か?!」

和希は顔を赤くなりながら響に謝り。

「私こそ、ごめんね滑って！」

響もそれと同時に顔を赤くなりながら謝る。

「もう、寝ようか、ベッドまで送るよ！」

和希は未来をお姫様抱っこで、自室のベッドまで送り、響と寝る準備をし、リビング

に行こうとすると。

「和希君、せっかく恋人になったから、一緒に寝て、響と一緒に、お願い！」

「わかったよ！」

和希は未来のお願いで一緒にベッドに寝る、響は右側、和希は真ん中、未来は左側に寝る。

「夜のホテルの料理美味しかったね未来、ワイワイと楽しかったよ！」

「そうね、進之介さん達、私達の為にお祝いしてくれて嬉しい、ゴホゴホ！」

未来は響とホテルの料理の話をしながらちよつとひどい咳をし、和希は未来の背中を優しくさする。

「和希君、ありがとう！」

「どういたしまして、そういえば聞きたい事があるけど、あの写真、チェイスさんの事、知ってるのか?！」

和希は響と未来に写真立てに写ってるチェイスの事を話し。

「和希君、チェイスさんの事、知ってるの?!」

「ああ、俺が小さい頃、両親と俺を救ってくれたからな！」

和希は響に小さい頃の自分と両親を救ったチェイスの話をし。

「あの人、小さい頃、森に迷った私と響を助けてくれたの！」

未来は小さい頃、森に迷った自分と響を助けてくれたの話し、思い出す。

1999年前、2015年

響と未来の両親が休みで、景色のいい森へ一緒にピクニックに行き、楽しむ。

(未来、森に入ろうよ、楽しいよ!)

(ダメよ響、この森は迷うから駄目だってお母さん達に言われたの!)

(大丈夫、ちよつとだけなら行くよ!)

響は未来の忠告を無視し、未来と一緒に森に入り、進む。

(響、なんだか怖いね、この森!)

(うん、戻ろうか?!)

響と未来は両親のいる場所に戻る場所を迷ってしまい。

(ひっく、響、怖いよ、お父さん、お母さん!)

(未来!)

響は泣いている未来を心配し、すると。

(どうした?迷っているのか?!)

響と未来の心配している、紫のジャケットとズボンをはいた青年、そう彼こそがチェ

イス。

(ひっく、お父さんとお母さんの所へ戻ろうとしたけど迷ったの!)

(未来、大丈夫だよ、絶対に戻れるから！)

響は元気な声で戻れるように未来を励まし。

(ならば、俺がお前らの両親の所へ連れてってやる、心配するな！)

チェイスは不器用な声で響と未来を両親がいる場所まで連れていき、未来と響をライドチェイサーに乗せて、歩いて押し。

(お兄さんの名前は誰ですか?!)

(俺はチェイスだ！)

未来はライドチェイサーを押してるチェイスに声をかけ、チェイスは名前を教える。

(ねえねえ、チェイスさん、チェイスさんは好きな人いますか?、私は未来が大好きだよ！)

響はチェイスに好きな人はいる?と質問し、自分は未来が好きと言い、チェイスはこう語る。

(俺は、好きな人なんていなかったんだ！)

そう、チェイスはロイミュードで、好きな人なんていない、すると。

(ノイズ?!)

ノイズが現れ、響と未来の方へ向かう。

(響、未来と一緒にここに待て、すぐ終わる！)

チエイスは響と未来をライドチエイサーと一緒に待てと忠告し、マツハドライダーを腰につけシグナルチエイサーを装填。

シグナルバイク！

(変身！)

ライダー！チエイサー！

チエイスは仮面ライダーチエイサーに変身し、ノイズを殲滅する。

シンゴウアックス！

響と未来を乗せたライドチエイサーからシンゴウアックスを出し、ノイズどもに向かって振り、消滅。

(大型ノイズ？ならば！)

チエイサーはシグナルチエイサーをシンゴウアックスに装填し。

ヒツサツ！マツテローヨ！

チエイサーは大型ノイズの攻撃を受けながら響と未来を守り、そして。

イツテイーヨ！

シンゴウアックスのイツテイーヨの合図が来て、チエイサーはシンゴウアックスを大型ノイズに向かってぶん投げた。

フルスロットル！

シンゴウアックスの一撃で大型ノイズは消滅。

オツカーレ!

チエイスは変身を解除し、響と未来の方へ歩く。

(大丈夫か?!)

(ありがとう、チエイスさん!)

未来はノイズに襲われそうな響と自分を助けたことをお礼し。

(気にするな、人間を助けるのが俺の主義だ!)

チエイスはそう言いながら、響と未来を乗せたままのライドチエイサーを押し、する
と。

(響?!)

(未来ちゃん?、心配してたわよ!)

響と未来の両親が二人を見つけ、心配する。

(お父さん、お母さん、ごめんなさい、でも、私と未来が迷ってたのをチエイスさんが助けてくれたんだよ!)

響は両親にチエイスを紹介し。

(チエイスさん、娘の響を助けていただきありがとうございます!)

(娘の未来の事もありがとう感謝するよ!)

響の父親と未来の父親がチェイスに森に迷った響と未来を救った事をお礼する。

(気にするな、助けただけの事だ！)

チェイスは二人の父親に言い、去ろうとしたが。

(待って、チェイスさん！)

(せっかく助けたんだから未来と私と一緒に写真を撮ろうよ！)

未来は去ろうとしたチェイスを止め、響と一緒に写真を撮ろうよと声を掛ける。

(わかった、写真を撮るだけならいいだろ！)

(やった、お父さん、未来とチェイスさんと一緒に写真撮りたい！)

(わかった、カメラを用意する！)

響の父親がカメラを持ち、響と未来とチェイスの所へかけつけ。

(よし、響、未来ちゃん、チェイスさん、写真撮りますよ、いい？ハイチーズ！)

カシャ！

響の父親のシャッター音がなり、写真を見て、すると、真ん中にはチェイス、響はチェ

イスの右隣、未来はチェイスの左隣の写り、すごくよかった。

(ありがとう、二人の事は忘れないぞ！)

(チェイスさん、ありがとうございます、また会いましょう！)

ライドチェイサーに乗って去るチェイス、響と未来は手を振って感謝を伝えた。

「森に現れたノイズをチェイスさんが倒してお父さんとお母さん達のいるところまで連れていって、たどり着いたの、お父さん達も心配して！」

「あれは響が勝手に行ってたから迷ってたわよ、もお！」

響と未来は小さい頃の思い出話をし、笑顔で笑い。

「そういえば、和希君、何で右手だけ黒い手袋をしてるの？、ご飯を食べてる時だつてしてたけど?！」

響は和希の右手だけ黒い手袋をしていたのを気付き。

「いや、二人に見せたら悲しむかもな、見せられないよ！」

「私も気になりたい、和希君の手！」

「わかった、今見せるよ！」

和希は響と未来と一緒に寝てるベッドを起き上がり、右手の手袋を脱ぐ。

バサッ

「えっ?!」

「これだけじゃないよ！」

和希は羽織っていた服も脱ぎ、右腕と右手首が銀色の機械みたいな腕を響と未来に見せる。

「ひいつ、和希君、どうしたのその腕?!」

未来は驚いて和希の右腕を心配し。

「これか、五年前、君たちに出会った前にも、剛さんの親友を復活するために研究の手伝いをしてたんだ！」

和希は響と未来に、五年前の思い出話をする。

5年前、2029年！

りんなの研究所でチェイスの復活実験を再開する剛とりんな、そして警察官になったばかりの和希がいた。

(よし、チェイスを復活する実験よ、いいわね？剛君、和希君！)

(はい、この実験、必ず成功してみせます！)

(ああ、お前がガキの頃に助けてくれたアイツを絶対に甦らせるからな！)

実験台に置いてるチェイスのプロトロイミュードをポンと触って和希と話す剛。

(じゃあ、起動するわよ、スイッチオン！)

りんなはパソコンに搭載しているチェイスのデータを起動し、それを実験台に置いてるプロトロイミュードにデータを入力、すると。

ーバチバチバチー

りんなの起動していたパソコンから電流が流れ、プロトロイミュードも同じ電流が流れた。

(何だ？りんなさん、どうなったんすか?!)

(大変よ、プロトロイミユードの体内全体の回路が壊れてオーバーヒートしてるわ!)

(まずい、りんなさん、実験中止だ、電源オフだ!)

(駄目、電源オフ出来ないわ、このままじゃショートして爆発するわ!)

りんなはパソコンを電源オフしても止まらない、すると。

(剛さん、りんなさん、俺がなんとか止めてみせます!)

和希はパソコンを止めようとする。

(おい、和希、危険だ？下がれ!)

(嫌です、剛さんのダチのチェイスさんのデータを失うわけにはいきません!)

和希は剛の忠告を無視して電流を流れながらパソコンを止め、すると。

ビリビリビリビリ

(ぐわー!)

プロトロイミユードから電流が流れ、和希の巻き込み。

ドーン

(和希ー?!)

爆発し、剛は和希の名を叫ぶ。

爆発の煙が消えると。

(和希君?、剛君、和希君は無事よ、プロトロイミュードも無事だわ!)

(和希君、無事だったのか?、おい、何だよその腕は?!)

剛は和希の右腕を見て驚く。

(えっ、どうしたんですか? 剛さん、俺はチェイスさんのデータを守れましたよ!)

(そうじゃねえ、お前、自分の右腕を見ろよ!)

(えっ?、うわあああ、何だよこれ、俺の右腕はどうなったんだよ?!)

和希は自分の右腕を見て、凄く驚き、銀色の機械みたいな腕になった。

(その腕はチェイスのプロトロイミュードの右腕だぞ、こっちはあるのにどうなってるだ?!)

(恐らく、調べたところ、さっきの爆発で、和希君の右腕がプロトロイミュードの右腕を触れ、変異してるわ、恐らく、もう人間の腕には戻らないわ!)

りんなは和希の右腕を調査し、分析して和希に解析し、事実を知る。

(そんな、じゃあ、りんなさん、俺の腕はもう?!)

和希はりんなに不安そうな顔をし自分の右腕の質問。

(そうね、あなたの体は無事だけど、右腕だけは戻れなくなったの、ごめんなさい!)

りんなは事実を和希に伝えた。

(そんな、嘘だ? 嘘だー!)

和希は大きな声で叫んだ！

「そして現在は、剛さんとりんなさんはチェイスの復活を中止し、ネオロイミュード対抗のため、りんなさんと剛さんは、2つのプロトロイミュードを使ってハート警部とブレン署長を復活し、正義のために戦い、剛さんは星が見える森でチェイスさんの墓をたてたんだ！」

和希は5年前の事実を語り、すると。

「じゃあ、和希君は皆や私と未来の為に戦ってるの？その腕になっても?!」
響は和希に皆や未来や自分の為に戦ってるのを話し。

「ああ、今は剛さんとりんなさんからマツハドライバー炎とシグナルチェイサーを託され、チェイスさんの魂を受け継いで仮面ライダーチェイサーとして戦ってる！」

和希は響と未来に仮面ライダーチェイサーの話をし。

「ひっく… 和希君、その腕になつてまで私や響だけじゃなく、皆のために戦つてたの?!」

未来は涙を流しながら和希と話し。

「ごめんよ、未来、俺のこの右腕を見せて、でも俺は響や未来の幸せの為に戦つてるんだ！」

和希は泣いている未来を支え抱きしめる。

「チエイスさんは?!」

「剛さんからの話を聞いて、ゴールドドライブから剛さんを守って死んだんだよ!」
和希は未来を抱きしめながらチエイスの話をし、剛さんの事を思い出す。

(ああ、チエイスウウウ!)

「チエイスさんがいないけど、響と未来には俺がいるよ!」

「和希君、お願いを聞いて!」

「えっ?!」

未来は和希の顔を近づいて唇と唇を重ねてキスをした。

「私、響と和希君と一緒に側にいたい、私は響と和希君と結婚して幸せになりたい。」

ううー!」

未来は涙を流しながら和希にお願いを言った。

「未来!」

「それでも俺は2人の事を愛してる!」

和希は二人の事を愛していると伝え、響と未来にキスをし、交互に抱きしめて夜を過ぎた。

(チエイスさん、俺、未来の余命までに響と未来の為に幸せを守るよ!)

最終回、未来の最後の約束、後編。

次の朝、響と未来が目覚ますと、ベッドの真ん中にいる和希がいなかった。

「和希君?!」

響と未来は裸体状態で起き、服を着て、響は未来の着替えの手伝いをし、車椅子に乗せりビングに行く。

「あれ?朝ごはんが作ってある?!」

テーブルにはベーコンエッグとパンが置いてあり、それを驚く響。

「和希君?作ってくれたんだ!」

「あれ?手紙が置いてある?!」

未来はテーブルに置いてる手紙を開いて読む。

（響、未来、昨日は本当にありがとう、俺も近々、響と未来と一緒に住もうと考えてる、それまでは我慢してくれ、PS、朝ごはん、俺が作つといたから、後、俺のアドレスとLINEのID書いといたから、時間が空いたら連絡するんだぞ!）

「和希君、ありがとう!」

未来は和希の手紙を読んで感謝をし、響と朝ごはんを食べる。

その頃、和希のマンション、私服に着替えて仕事に向かおうとした和希。

ブー、ブー！

和希のスマホがなり、見てみると、未来からのLINEがきた。

（和希君、土曜日と日曜日は空いてる？、実は響と私と一緒にデートに行きたい！）
と書いており、和希が。

（土曜日と日曜日は休みで空いてるから大丈夫だよ！）

と書いて送信し。

（良かった、じゃあ土曜日に私と響のマンションの前で待つてる！）

「響、未来！」

二人の名前を言い、ライドチェイサーに乗って仕事に行き。

新生特状課事務所

「フッフフフーン！」

和希は自分の机で鼻歌をし、喜び。

「和希さん、何喜んでるデスか?!」

「もしかして、未来さんと響さんからの連絡ですか?!」

「うわっ？切歌、調、驚かすなよ?!」

後ろから和希を驚かす切歌と調。

「ああ、実は、俺、土曜日に響と未来と一緒にデートに行くことになったからな！」

「デデデス？響さんと未来さんとのデートデスか?!」

切歌は和希と響と未来とのデートで驚いた。

「和希さん、服のコーデイネットはどうするのですか?!」

調は和希に服のコーデイネットはどうするかを聞き。

「そうだな？、今日は時間がないからやめとくよ！」
すると。

「ダメデス、和希さん、せっかく響さんと未来さんの彼氏になったのに服のコーデイネットをしないとは何デスか?!」

切歌は和希に服のコーデイネットをするように説教し。

「切ちゃんの言う通りです、ですからせっかくです、お昼休みに一緒に服のコーデイネットの買い物に行きますよ！」

調は怒った顔で和希に近づき、買い物に行こうと説得。

「は、はい、行きますー！」

「そうと決まれば仕事の資料を早めに終わらせていきましようー！」

「ブレン署長、お昼休みに和希さんの服を買いに行きますので、和希さんをお借りするデス！」

切歌はブレンに和希を借りると伝え、仕事の資料を張り切つてやる。

「はて？切歌さんは今日は真面目ですね、どうしたんですか?！」

ブレンは仕事の資料を頑張つてる切歌を見て、?になり、見る。

「今日の切ちゃんとは真面目です、署長、土曜日に和希さん、響さんと未来さんのデートなので、服のコーディネートと買い物に行きます！」

「そうですね、えっ?、ええええええええええええー！」

ブレンは調の和希と響と未来のデートという言葉で驚いていた。

「アイツが響ちゃんと未来ちゃんとの初デートか、頑張れよ！」

「私も進之介も心から応援するぞ！」

進之介とベルトさんは土曜日の和希の初デートを心から応援した。
そして昼休み

「ブレン署長、行つてきますデス！」

「終わつたらすぐ戻ります！」

切歌と調は和希を両腕をしっかりと掴み、車に乗つて服屋に向かう。

東京シテイの洋服店

「えーと、和希さんが似合う服はどれデスかね?!」

切歌は和希に似合う服を探し、迷い。

「切ちゃん、これなんか似合うかな?!」

調は切歌に和希に似合う服を見つけ見せる。

「おおー、これは派手でいいデスよ調!」

「和希さん、これはどうですか?!」

調と切歌は和希に服を見せ、チエツクし。

「あのさ、切歌ちゃん、調ちゃん、俺一人で選べるからいいよ!」

「ダメです、私と切ちゃんが選んだデート用の服を着ないといけません!」

調は和希の言葉を拒否する。

数十分後。

「切歌ちゃん、調ちゃん、俺のためにありがとう、感謝するよ!」

「いいデスよ、アタシも調も和希さんのコーディネートは楽しかったです!」

「切ちゃんが選んだ服はちよつと派手すぎだよ、私が選んだ服は考えて選んだからね

!」

和希は切歌と調に服を選んだ事を感謝をし、切歌と調は自分達が選んだ服の話をする。

「でも、いいのか？、こんなのプレゼントして?!」

「和希さんには色々とお世話になりましたから、私と切ちゃんからの感謝のお礼です！」

「土曜日は頑張るデス！」

切歌と調はグーサインを出し、和希を応援した。

そして土曜日

和希のマンション

和希は調と切歌が選んだ服を着て鏡を見る。

「よし、行くか！」

和希は服のコーディネートを完了し、響と未来のいるマンションに向かって歩く。

響と未来のマンション

マンションに着いた和希は下に待つ。

「和希くん、待った?!」

「いや、そんなことないよ、俺が早めに来てたから待ってたよ！」

「じゃあ、行こうか！」

響は車椅子の未来を押して和希と並んで歩く。

「どこに行く?!」

和希は響と未来にどこに行くかと声を掛け。

「じゃあ私、未来と森に行きたい！」

「いいかな? 和希君?!」

「もちろんだよ、俺もそこに行こうかなと思ってたよ、その前に花屋に行っていない?!」

「いいよー!」

和希は響と未来を連れて花屋に行き、花を買って、森へ行く。

「19年ぶりだね、ここに来るの!」

「そうね、懐かしい!」

響と未来は19年前ぶりに懐かしいと言い。

「俺はいなかったけどな!」

和希は響と未来と一緒に森の方へ向かい、そこには紫のジャケットを置いた墓石が

あった、そうチエイスの墓だ。

「和希君? あれ?!」

未来はチェイスの墓の前に人影を見つける。

「剛さん?!」

「よう、和希、どうしてここに来たんだった?!」

「今日は休みなので未来と響とデートで、墓参りに来ました!」

「はじめまして、剛さん、私は立花響です、和希君の彼女で、こっちは幼なじみで同じ和希君の彼女の未来です!」

「小日向未来です!」

響と未来は剛に礼儀正しい挨拶をする。

「そうか、進兄さんから聞いた和希の彼女か!」

和希は花束をチェイスの墓におき、響と未来と一緒に目をつぶってお参りした。

「あの… 進之介さんとはどういう関係ですか?!」

未来は剛に進之介とはどういう関係と話し。

「ああ、19年前から一緒に戦ってたんだ!」

剛は進之介と一緒に戦ってた事を話し、響は。

「チェイスさんの墓、ここであんなに話したんですね?!」

剛にここにチェイスの墓をたてたことを話す。

「ああ、星の見えるところにアイツの墓をたてようと思ったからな！」

「チェイスさん、私と響は和希君の恋人になりました、私達は今も幸せです！」
未来はチェイスの墓に和希の恋人になったことを伝える。

「さて、行くか！」

「剛さん、行くんですか?!」

「ああ、ハニーの玲子が待つてるからな！」

「そういえば玲子さんと結婚しましたね、気を付けてください！」

「ありがとよ、和希、結婚式の時は俺と玲子も呼べよ、俺の息子も盛大に祝ってやるぜ
！」

剛はライドマツハーに乗って和希に結婚式を盛大に祝ってやるぜと伝え、去る。

「剛さん、からかわないで下さいよ、あれ？響？未来?!」

未来と響は剛の結婚式の言葉で顔が真っ赤になり。

「か、和希君？景色の良いところでお昼にしよう?!」

響は慌てて景色の良いところでお昼にしようと言ひ、未来を押して進む。景色の良い
ところに着き、お昼の準備をする。

「お弁当、私と響が朝早く起きて作ったの！」

「おにぎりは私が作って、おかずは未来が作ったの！」

響は和希に弁当を見せると、綺麗に並べてる卵焼きや唐揚げやウインナーや野菜や普通のおにぎりがあった。

「へー、いい出来前だね、それじゃー！」

「『いただきます!!!』」

三人はいただきますを言い食べ始める。

「唐揚げうまいな、未来、玉子焼きも美味しいよ、この味は大好きだよ！」

和希は未来の作った唐揚げと玉子焼きをつまんで美味しいよと誉め。

「そ…そうかな、でも、嬉しい、ありがとう！」

未来は赤くなりながら和希にありがとうと伝え、和希は響の作ったおにぎりを食べる。

「どう？私の作ったおにぎりは?！」

「うっ…ゴホツゴホツ、響、塩ちよつと入れすぎだよ！」

和希は響の作ったおにぎりに塩ちよつと入れすぎだよと注意し。

「えっ、このくらいだといいのに、うっ、ごめん！」

響は自分で食べてみると、うっ、と言い、ごめんと謝り。

「けど、この味、なかなかいけるよ、響と未来はいいお嫁さんになれるよ！」

和希は響にこの味なかなかいけるよと慰め、響と未来にいいお嫁さんになれるよと伝

える。

「えっ?、そうかな!」

響は顔が赤くなりながら弁当を食べる。

それから数十分後、お昼を終え、ゆっくり座る三人、響と未来は子供と両親と一緒に遊んでる場所を見て微笑む。

「響、未来、一緒に写真撮ろうぜ、記念に!」

和希はスマホを出して、響と未来と一緒に写真を撮ろうとお願いし。

「いいよ、景色の良いところで撮ろう、せっかくだから!」

和希と響と未来はお昼の整理をし、景色の良いところで写真を撮る。

数時間後、デートを終え、和希は未来の車椅子を押し、響は隣で歩きながら話をし、響と未来をマンションに送る。

「今日は本当にありがとう、和希君、私も未来もすごく良かったよ!」

「ああ、響、未来、今度は俺の料理を食べさせてあげるよ、料理はうまいからな!」
和希は響と未来に今度は自分の作った料理を食べさせる約束をし。

「響にも料理を教えてね!」

「もう、未来!」

「あはは、じゃあな、響、未来!」

和希は響と未来のマンシヨンの玄関を閉め、歩いて帰った。

そして夜、和希のマンシヨン

「明日も休みだし、越田警部とハート警部を誘って飲みに行くか！」

和希はハートと源八朗に飲みに行こうとLINEをし、撮った写真を見る。

「響、未来！」

自分と響のツーショット写真と未来のツーショットを見て微笑む。

その頃、響と未来のマンシヨン

「ゴホツゴホツ、和希君！」

未来は寝間着になり、咳をしながら和希の名前を言い。

「未来？明日もお休みだから久しぶりにお昼に 크리스ちゃん と喫茶店行こう、連絡したらOKもらった！」

響は未来に 크리스 と喫茶店に行こうと誘い。

「うん、和希君の事も話をしよう！」
すると。

「うっ、ちよつとトイレ！」

響は口を手で押さえてトイレに行き。

「うっ！」

未来も同じ吐きそうになり、急いで車椅子で洗面所に行く。

「うっ、…… おええええ！」

未来は洗面所で嘔吐した。

「まさか？ 私と響のお腹の中に和希君の……!!」

未来はお腹をおさえて不安な顔をした。

次の日の朝

響と未来は朝ごはんを食べて、病院に行つて検査をし、終わるまで待ち。

「立花さん、小日向さん、検査が終わりました、検査室へ来てください！」

「あつ、はい！」

看護師さんの声が聞こえ、響は未来を連れ、検査室へ向かった。

「響さん、未来さん、検査の結果が出たよ！」

医師は響と未来に検査の結果を伝える。

「おめでとう、二人のお腹の中にひとつの命が出来たよ！」

医師は響と未来にお腹の中にひとつの命が出来た事を話す。

「もしかして私と未来は?!」

「ああ、妊娠してるよ！」

「先生、出産は何カ月ですか?!」

未来は医師に何か月で出産を相談し。

「そうですね、今は3月だから6ヶ月で9月が予定日だね、二人とも！」
医師は二人に出産が9月と告げ。

「栄養剤はお願いできますか？、私も亡くなる前に頑張つて産みたいです！」
未来は医師に栄養剤をお願いし、医師は。

「そうだね、二人とも、9月に予定日だから入院するときにやろう！」

「未来！」

「ひっく…良かった、響、私達、赤ちゃんが出来たね！」

「私のお腹の中に和希君と私の子供、未来のお腹の中に和希君の子供が出来たね！」

未来はお腹の中に赤ちゃんが出来た事を喜んで泣き、響はお腹をさすつて喜ぶ。

一方、和希のマンション

お昼になり、和希は家で作ったチャーハンを食べ、食べてる最中に響と未来からLINEが来た。

「あれ？響と未来からだ、どれどれ?!」

和希は響と未来からきたLINEを見る。

響（和希君、いいお知らせ、私と未来のお腹に子供が出来たの！）

「えっ?… ええええええ?!」

和希は響から来たLINEを見て驚いた。

「えっ?、どういうことだ?!」

和希は響と未来に理由をLINEで送り、今度は未来からLINEがきた。

未来（実は昨日の夜、私と響は寝る前に嘔吐して、今日、病院に行ったら赤ちゃんが出来たの!）

と書いており、和希は。

「どうしよう?俺は結婚するか迷う?、そうだ!」

和希はスマホで電話をする。

「もしもし、進之介警部?今日はお休みですか?!」

「ああ、今日は休みだが?どうした?!」

「実はちよつと、相談したいことがありますか?!」

和希は進之介と連絡する。

「ああ、わかった、とりあえず俺の家に来てくれ!」

進之介は和希に家に来いと伝え、電話を切る。

「そうだ、あの人にも来るように連絡しよう!」

進之介はあの人に電話して来るように連絡をする。

一方その頃、喫茶店。

響と未来は席を取って誰かを待つ。

チリンチリン

「いらっしやいませ！」

入り口のベルがなり、店に入る銀髪のウェーブヘアのハーフ女性、そう、彼女は雪音クリス、現在は25歳で、亡くなった父と母の後を継いでバルベルデで歌の活動、夫と娘と日本で暮らしている。

「よう、久しぶりだな、バカ響と未来！」

「クリスちゃん、久しぶり！」

クリスは響と未来のいる席に座り、メニューをとる。

その頃、和希は昼食を終え進之介のいる泊家まで行き、ピンポンを鳴らす。

ガチャ

「和希さん、来てたんですか、父さんが待ってましたよ！」

「ああ、お邪魔するぞ！」

和希は泊家の中に入り、進之介のいるリビングに向かい、すると。

「おっ、和希、来たか！」

「待つてる間、進之介がこの人も誘ったんだ！」

「始めましてかな？和希君、俺は風鳴玄十郎だ！」

進之介の隣に座ってるワインレットのスーツでアゴヒゲが特徴の中年、風鳴玄十郎、現在は自宅で道場を勤めている。

「始めまして、玄十郎さん！」

和希は軽く挨拶をし、椅子に座り、進之介達の前を向く。

「それで和希、俺に相談したいことあるのか?！」

「はい、実はー！」

和希は進之介に相談したいことを話し。

「そうか、響と未来ちゃんと結婚するか迷ってるのか?！」

「はい、実は響と未来から連絡が入って、二人のお腹の中に赤ちゃんが出来ていて、俺はどうすればいいかと！」

和希は進之介と玄十郎に響と未来が妊娠したことを話し、自分はどう迷っていた。
ドン

進之介は机をドンと叩く。

「進之介警部?！」

「和希、お前は自分自身で迷わず響と未来と結婚して、幸せな家庭に築くんだ、俺だっ

て、霧子と結婚しようと思んだり、迷ったりしたことがあった、源さんや、タケル君が背中を押してくれたから霧子と結婚して、英二を産んで、家族になれた、今でも俺は幸せだ！」

進之介は昔、霧子と結婚しようと思つたことや悩んだことやタケル君達に背中を押してくれたことや、和希が響と未来の為に結婚しようと思つたことをする。

「和希君、君は本当に響君と未来君の事を大切なのか?！」

「玄十郎さん、俺は……！」

和希は玄十郎の言葉を聞いて、真つ直ぐな目で進之介と玄十郎に言う。

「俺は、響と未来と結婚します、例えどんな未来だつて乗り越える！」

和希は玄十郎と進之介に響と未来と結婚する事をはつきり言い。

「和希、迷わずよく言つたな、それでこそお前の本心だ！」

「うむ、和希君、君にこれを渡そう！」

玄十郎はズボンのポケットから2つの小さな箱を出し、和希に渡す、開くと。

「これは?!！」

2つの小さな箱から2つの小さな宝石の指輪が入つてた。

「響君と未来君にあげる結婚指輪だ、受け取つてくれ！」

「でも、玄十郎さん？俺、受け取れませんか！」

和希は受け取るのを拒否し、すると。

「和希、受け取ってやってくれ、玄十郎さんはお前と響ちゃんと未来ちゃんのために作つたんだ！」

「ああ、宝石の方はハート君に頼んで作つたからな！」

玄十郎は和希に指輪を作つたことを話し。

「では、ありがたく受け取ります！」

和希は玄十郎に感謝し、2つの結婚指輪が入つた2つの箱を貰う。

それから話が終わって和希は泊家の玄関で靴をはく。

「進之介警部、玄十郎さん、俺、頑張ります！」

「ああ、頑張れよ和希！」

「君なら響君と未来君を大切に出来るな！」

「はい、ありがとうございます、では！」

ガチャ

和希は進之介と玄十郎に感謝をし、泊家を出た。

「玄十郎さん、今日は助かりました、あいつのため！」

「ああ、響君と未来君には、色々世話になったからな、これくらいなんともないさ！」
その頃、喫茶店

響と未来は喫茶店で料理を食べながらクリスに和希の話をしてる。

「はあ？、お前と未来、和希という奴と結婚を考えてる?！」

クリスは響が口にした言葉ではあ?と言い。

「私と未来、和希君と結婚するか考えてるの、病院に行つて私と未来のお腹の中に赤ちゃんが出来てから、未来は喜んで泣いてた！」

「私の余命は後、8ヶ月、それまでは響と私、和希君と結婚する！」

未来と響はクリスに向かって迷わず言う。

「そうだよな、もう止めねーな、アタシは旦那と結婚する前は悩んだり迷ったりしてたけどよ、おっさんが、アタシのために背中を押してくれたから、結婚することが出来た、娘も産まれて、幸せだ！」

クリスは夫と結婚する前、玄十郎に背中を押してくれた事を言う。

「師匠が?!」

「ああ、おっさんには感謝してたからな！」

ピピピ

クリスのスマホが鳴り、LINEを見る、相手は玄十郎。

「おつ、おっさんから連絡か、あいつももう覚悟を決めたみたいだぜ！」

「クリス、ありがとう、私と響は自分自身で和希君と向き合う！」

未来はクリスに感謝をし、響と一緒に自分自身で和希と向き合うと言う。

数十分後、喫茶で食事を終えた響と未来とクリス、クリスは用事あつて帰り、響は未来を押して買い物に行く。

「響、止めて！」

響は未来の車イスを止め、店に飾ってるウエディングドレスを見る。

「響、私達、似合うかな?！」

「似合うよ未来！」

響と未来はウエディングドレスを見て似合うと話し合う。

そして、夕方、居酒屋

和希はハートと源八朗と料理をつまみながら酒を飲んでいる、源八朗はビールで、ハートはストロベリーサワーを飲み、和希はリングチューハイを飲んでいた。

「和希、最近どうだ？響と未来とは上手くいってるのか?!」

ハートは和希に響と未来とは上手くいってるのかを話し。

「ええ、実は今日、未来と響から連絡があつて、二人のお腹の中に赤ちゃんが出来て、進之介警部の家に行つて、相談しに、玄十郎さんも訪れて、背中を押してくれたんですよ、俺と響と未来の結婚のために！」

和希はハートに玄十郎と進之介が和希と為に背中を押してくれたことを話し。

「結婚かあー、そういえば昔、俺にもあつたな、嫁と婚約時代、婚約を破棄しかけ、嫁が婚約指輪を投げたな、でも、ハートのおかげで、嫁と婚約をやり直して結婚出来たし、ヒック！」

源八朗は酔っぱらいながら妻のりんなどの婚約時代の思い出話を語り。

「越田警部、ハート警部に助けられたんですか?!」

「ああ、相棒のおかげで幸せになれたからな！」

「今でも俺は正義のロイミュードとして、源さんの相棒として仮面ライダーのなつて戦つてる！」

ハートと源八朗と和希は酒を飲みながら会話をし、楽しんだ。そして、2時間後に終え、ハートは酔った源八朗を家に連れて帰り、和希は歩いて自宅に向かう。

ピ。ピ。ピ。

和希のスマホが鳴り、見ると、未来からの連絡、和希はそれを出る。

「はい、もしもし？未来？どうしたんだ?!」

「和希君、海辺に来て、私と響、話したいことがあるの!」

「ああ、わかった、俺も言いたいことがあるんだ!」

和希は未来からの電話を切り、海辺に向かい走る。

海辺

海辺に着いた和希は響と未来の姿を見つけ向かう。

「はあはあ、お待たせ!」

和希は息切れながら二人と合流。

「和希君？走ってきたの?!」

響は和希を心配する。

「ああ、時間を待たせちゃ駄目だからな、無理して走ってきた!」

和希は落ち着いて深呼吸し、未来の隣に座る。

「和希君、私からきたLINEを見た?!」

「ああ、見たよ、二人とも、俺のせいでごめん!」

和希は響と未来に自分の子供が出来たことを謝る。

「謝らなくていいの、私も子供が出来て喜んで泣いて、響はお腹をさすって喜んだの、むしろ嬉しい！」

「未来！」

和希は未来の話を聞いていた。

「未来、響、俺からの告白を聞いてくれ！」

和希は真つ直ぐに響と未来の前に向き、そして。

「響、未来、俺と結婚してくれ、俺は二人の事を大切にしたい！」

星空が光り、和希は響と未来に向かってプロポーズを伝え、すると。

「いいよ、次は私と響からの話を聞いて！」

未来と響は和希の前に伝える。

「私達、小日向未来と立花響は、青島和希君の事を誰よりも、ずっと愛しています、あなたと結婚します！」

響と未来は同時に和希に結婚を伝え、すると。

「ああ……俺もずっと愛してるよ！」

和希は愛してるよと言いながら泣いていた。

「やだ、和希君が泣いてる！」

「響ー、あつ、そうだ！」

和希はポケットから2つの小さい箱を響と未来に渡す。

「これは？なに?!」

「これは二人にあげる結婚指輪なんだ、実はこれ、玄十郎さんが俺と響と未来の為に作ってたんだ！」

「嬉しい、ホントにありがとう、じゃあ和希君、私と響の指に指輪をはめて！」

「ああ、喜んで！」

和希は響の左手の薬指に結婚指輪をはめ、次に未来の左手の薬指に指輪をはめた。

「次は和希君のはめる！」

響は和希の右手の薬指に指輪をはめ、未来は和希の左手の薬指にはめた。

「似合ってるな、俺達！」

「よかったね、未来！」

「響も嬉しそうね！」

「響、未来！」

和希は2人の名前を伝え、キスをし、未来の方はしゃがんでキスをした。

「1ヶ月間、結婚は待つて、俺、頑張つて、響と未来と一緒に住める家を買つて、二人の両親に結婚のこと話すよ、それまでは！」

「うん、私も未来も待つてる、和希君の事、だから約束！」

「ああ、約束だ！」

和希は響と未来に1ヶ月間、やることを約束し、家に帰る。

「和希、おめでどう！」

「響君も未来君もおめでどう！」

進之介と玄十郎は海辺の外で和希と響と未来におめでどうを伝えた。

そして、1ヶ月後、4月

和希は1ヶ月間、頑張つていた、響と未来の両親に結婚の事を話し、結婚を認められ、次に一緒に住める一戸建ての1LDKの家を買った、玄十郎さん達がお金を払い、ローンは自分が払うようになり、引っ越しの準備や、響と未来の手伝いをし、ブレン署長が和希に家族で行く車をプレゼントし、市役所に行つて婚姻届を出した。

そして一週間後。

今日はホテルで和希と響と未来の結婚式をおこなう。

更衣室で和希は新郎用の青いウエディングスーツを着た。

「和希、似合うな、そのスーツ！」

「進之介警部、英二！」

和希の更衣室に訪れたのはスーツを着た進之介と学生服を着た英二。

「和希さん、結婚おめでとうございます、僕も父さんもあなたには感謝いたします！」

「私も進之介も君には色々と助けてくれてありがとう、これからは二人の夫として頑

張ってください！」

「ベルトさん！」

英二とベルトさんは和希におめでとうの感謝と色々と助けてくれたことを伝える。

「そういうえばハート警部達はどうしたんですか?!」

「ああ、ハートなら玄十郎さん達と話して、剛は準備があるからな！」

「そういうえばブレン署長は?、あれ?!」

和希は神父姿のメガネのハゲ青年に気づく。

「ブレン署長? なんですか、その格好は?!」

「見ればわかりますか? 私が神父の役として響さんと未来さんと和希君の結婚式を祝います！」

ピカン

そして、響と未来の更衣室で響と未来は純白のウエディングドレスを着て、化粧をする。未来の着替えはマリアと翼と霧子が着せて車椅子に乗せた。

「響ちゃん、未来ちゃん綺麗！」

「霧子さん、ありがとうございます、私と響、夢が叶えてよかったです！」

未来は霧子に感謝し。

「おめでとさん、バカ響、未来、よかったな！」

クリスは二人におめでとを伝え。

「クリスちゃん、ありがとう、私と未来は和希君と結婚する！」

「でも響、結婚したら私達は名前は立花と小日向じゃなくなるよ！」

「でもいいの、私と未来は和希君といてすごく幸せだよ！」

響は和希と未来といてすごく幸せと言う。

「それじゃ、行こうか、立花、小日向、青島が待ってるぞ！」

「はー！」

そしていよいよ結婚式が始まり、テーブルには泊家、ハート、立花家、小日向家、切

歌と調達、新生特状課、マリアと夫と息子、クリスと夫と娘、翼と慎二と娘、越田家、旧特状課、青島家、和希の友人、響と未来の友人の弓美と創世と志織の女子三人、剛と妻の玲子と息子、朔也とあおいと娘、玄十郎が座り、バージンロードの上には和希が立ち、ブレンは神父台にのる。

「それでは、二人の新婦の入場です！」

ブレンは台詞を言い、ドアが開き、結婚式の曲を流れながら響と未来がウエディングブーケをもってバージンロードに入場、付き添いには響の父親と未来の父親が行き、和希の隣まで止まり、響と未来の父親は席に戻る。

「では、新郎に誓いの言葉、青島和希、あなたは立花響と小日向未来を妻にし、将来、永遠なる愛を誓いますか?!」

「はい、誓います！」

ブレンの結婚の誓いの言葉を言い、和希は誓うと伝え。

「次に、立花響、小日向未来、あなた達は青島和希を夫にし、将来、永遠なる愛を誓いますか?!」

「はい、誓います!!」

響と未来は同時に誓うと言い。

「では、新郎様、二人と誓いのキスをお願いします！」

「はいー」

和希は響と未来のウエディングヴェールを上げ、まずは響と誓いのキスをし、次は未来をお姫様抱っこをし、誓いのキスをした。

パチパチパチパチ

皆は盛大に拍手をし。

「おめでどう、ビツキー、ヒナー！」

「響さん、未来さん、和希さん、おめでどうございます！」

「幸せになるデス！」

「おめでどう、和希、響ちゃん、未来ちゃん！」

「おめでどう、ハッピーウエディング！」

進之介達は拍手しながら三人を祝福し、すると。

「あれ？、チェイスさん?!」

未来は剛のテーブルにチェイスが見え、未来と響と和希の所へ歩く。

（和希、響と未来を守るんだぞ、お腹の中にいる、お前の命のため！）

「チェイスさん…： ありがとう、私達の為にお祝いしてくれて、私、最後まで頑張るか
らねー！」

「未来！」

未来は見えたチエイイスにお礼を言いながら涙を流す。

「ベルトさん、未来ちゃんの所にいるアイツはまさか?!」

「ああ、チエイイスだ、光になってまで響と未来と和希を祝福してるぞー！」

ベルトさんと進之介は未来の所にいるチエイイスが見え、気づく。

「チエイイスさん、俺、響と未来の為に頑張るよ、俺達を見守ってくれ！」

和希はチエイイスに響と未来の為に頑張ると誓い、チエイイスは消え、結婚式を続け、響と未来は両親に育ててくれた感謝を告げ、全員で乾杯し、料理を食べる、そして。

「よし、今度は俺が三人を派手に祝福する番だ！」

剛はテーブルから立ち、ステージに立つ。

「レディイス& amp; ジェントルメン、和希& amp; 響& amp; 未来のハッピーウエディング！」

剛は和希と響と未来の祝し、マツハドライバー炎を出し、腰につける

「剛? アイツまさか?!」

進之介はマツハドライバーを着けた剛に気づき。

シグナルバイク！

剛は白いシグナルバイクをドライバーに装填。

「レッツ、変身！」

変身ポーズを構え、スロットパネルを叩く。

ライダー！マツハ！

白い4つのタイヤが剛に近くに回り、白いアーマーが剛の体に装備、そう、19年前、仮面ライダードライブと仮面ライダーチェイサーと共にロイミュードを撲滅した仮面ライダーマツハだ。

「追跡、撲滅、いつでもマツハ、仮面ライダーマツハ！」

マツハに変身した剛は台詞を言いながらポーズを決める。

「やっぱり、結婚式の準備とはこれか！」

「よし、今度は俺からの三人に祝福サプライズだ！」

マツハはホルダーから白と銀色が混ざったシグナルバイクを出し、ドライバーに装填。

シグナルバイク！シンゴウコウカン！ウエディングスター！
すると、白と銀色の光がマツハに包む。

「みんな、電気を暗くしてくれ！」

電気を暗くし、なんと式場パーティー全体が星空のように輝いた。

「和希、響ちゃん、未来ちゃん結婚おめでとう、俺からのサプライズだ、見てくれ！」

マツハの体から光が発揮し、流れ星のような光になり、和希と響と未来の顔した星空が見え、英語でハッピーウエディングと書いてある。

「未来、見て、私と未来と和希君が見えてるよ！」

「剛さん、俺達にこの星空を見せるために祝福してくれたんだ！」

「でも、嬉しい！」

未来は自分と響と和希の顔した星空とハッピーウエディングを見て嬉しいと言う。

「あいつ、三人を祝福するために変身して星空を見せるようにしてたんだな！」

「ああ、あのシグナルバイクは、私が切歌と調に頼んで開発したんだ、結婚祝福の為に！」

「ベルトさんが切歌と調に頼んで作ったのか?!」

進之介はあのシグナルバイクはベルトさんが切歌と調に頼んで作ったのを驚く。

「剛さん…俺と響と未来の為にありがとうございます！」

和希は涙を流しながら剛に感謝した。

それから数時間後、みんなで結婚式の写真を撮り、次に響と両親の写真、未来と両親の写真、和希と両親の写真、響と未来と翼とクリスとマリアと切歌と調の写真、和希と響と未来の写真を撮り、最後、響と未来のウェディングブーケを切歌と調に渡し、幕を閉じた。

結婚式から数日後、響は仕事を辞め、専業主婦になることを決め、和希と未来を支えることにし、今日から三人の夫婦生活が始まる。

2階、和希と響と未来のベッド

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

和希は6時に起き

「あれ、ここは？そうか、俺は響と未来と結婚して一緒に住んでいるのか、あれ？響？未来?!」

和希はベッドに響と未来がいないと気づき、起き上がり、下へ向かう。

「あれ？いい匂いがする!」

和希はリビングに向かうと。

「あつ、おはよう和希君、朝ごはん食べる?!」

響と未来は朝食が出来て準備をした。

「ああ、今から食べるよ!」

和希は椅子に座って響と未来と朝食を食べる、テーブルにはトーストとウインナーとスクランブルエッグとコーヒーだ。

「和希君と結婚して私達幸せだね未来!」

「ええ、今も私達は恵まれてるね!」

響と未来は朝食を食べながら和希と結婚して幸せな話をしている。

(よかったな、響、未来!)

数十分後、朝食を終え、和希は2階で洗濯を干し、響と未来は食べ終わった食器を洗い。私服に着替えて和希はヘルメットとリュックを持って出勤しようと玄関に靴をはき。

「じゃあ、行ってくるね響、未来！」

「待って、あなた！」

和希はピタリと止まり、響は未来を押しして玄関に向かう。

「はい、これお弁当、響と五時半に起きて作ったの！」

「私の作ったおにぎりもちゃんと塩の適量を考えて作ったからね！」

（そうか、響と未来は俺のために弁当を早起きして作ってくれたのか！）

「ありがとう、響、未来！」

和希は響と未来の作ったお弁当とおにぎりをリュックに入れ、出ようとする。

「あなた！」

未来と響は玄関で唇を構え。

「わかったよ、響、未来！」

チュ、チュ！

和希は響と未来に行ってらっしやいのキスをし、玄関の扉を開け。

「あなた、今日は何時に帰ってくるの?!」

「今日から五時半に仕事が終わって早めに帰ってくるよ！」

未来は和希に何時に帰ってくるかを言い、和希は五時半に仕事が終わると言い、外に出る。

「行ってらっしやい！」

「行ってくるよ、響、未来！」

和希は扉を閉め、ヘルメットを被ってライドチェイサーに乗り仕事に向かう。

「響、今日の晩御飯は何にする?!」

「じゃあ未来、今日はカレーにしようよ、私も料理して和希君に食べさせよう！」

「じゃあお昼ごはん食べたら一緒に買い物に行こう！」

「うん！」

響と未来は晩御飯の献立はカレーにし、買い物に行こうと話す。

新生特状課

「おはようございますー！」

和希は元氣よく挨拶をし。

「おはようございます和希さん！」

「おはようございますデース！」

切歌と調は和希の挨拶が聞こえ挨拶をする。

「おはようございます、ブレン署長、進之介警部、ベルトさん！」

「よお、おはよう和希、今日は元気だけど、どうした?!」

「へへへ、響と未来の為に頑張らないといけませんからね!」

和希は元気ながら響と未来の為に頑張ると言い。

「和希君、あんまり頑張りすぎたら駄目だぞ、倒れたら響と未来が悲しむからね!」

「わかってますよベルトさん!」

ベルトさんは和希にあんまり頑張りすぎないことを言い、和希はわかっていた。

そして昼食

「さて、飯だ!」

和希は弁当を出し、ふたを開けると、未来の作った唐揚げとゆがいたブロッコリーと玉子焼きとハンバーグとミニトマトが入っており、響の作ったおにぎりは海苔に和希君 LOVEや響と未来が書いており。

「あれ、和希さん？未来さんと響さんが作った愛妻弁当ですか?!」

「ああ、響と未来が朝、五時半に起きて作ったんだよ!」

「いいな、和希さん、響さんと未来さんの作った愛妻弁当があつて、アタシ達も羨ましいデース!」

切歌は和希の弁当を見て羨ましそうな顔で見る。

「じゃあ切歌、おにぎり食べる?!」

「いいデスカ?じゃあいただきますデース!」

切歌は和希からおにぎりを一つ貰い食べ、すると。

「うっ?!」

おにぎりを食べた切歌は顔が真っ青になる!

「切ちゃん大丈夫?!」

調は切歌を心配し。

「デース?和希さん、響さんの作ったおにぎり、塩が多すぎデース!」

「そうかな?デートに行ったときは俺、この味が好きなんだよ!」

和希は平気でおにぎりを食べる。

「和希さん？　どういう舌を持つてるのですか?!」

「響ちゃん、おにぎりの時は刺激に作るなあ!」

「ああ、和希はよく平気で食べるな!」

調と進之介とベルトさんは和希が食べてる響の作ったおにぎりを平気で食べてるのを見てちよつと驚く。

そして夕方五時半になり、和希は帰る準備をし。

「それじゃ、お先に失礼します!」

「はい、気を付けてくださいね!」

和希はブレンに帰る挨拶をし、ライドチエイサーに乗って家に帰り。

ガチャ

「ただいまー!」

「おかえりなさい、あなた!」

「ただいま、未来、響は?!」

「今ね一緒にカレーを作ってるの、少し時間がかかるから先にゆつくりお風呂に入っ

てー！」

「ああ、わかった！」

和希はリビングに弁当箱を置き、2階に行って仕事部屋にリュックを置き、自分の普段着とボクサーパンツを取り、バスルームで風呂に入る。

「響と未来が作るカレーはどんな物か、何だろうな?!」

数十分後、和希は風呂から上がり、バスタオルで体を拭き、普段着に着替えてリビングに向かう。

「あつ、あなたー、ご飯が出来たよー！」

響は和希を呼び、和希は冷蔵庫からコーラを取り、リビングの食卓の椅子に座り、響と未来はご飯を皿にのせてルーをかけ、テーブルに置き、テーブルにはトマトとレタスのサラダが置いていた。

「「いただきますー！」」

三人はいただきますを言い、カレーを食し。

「あなた、どう? 味は?!」

響は和希に味の事を言い。

「うん、うまい、うまいよ響、未来!!」

「よかった、実は隠し味に未来がトマトを煮込んでカレーに加えたんだよ!」

和希は響と未来に旨いと誉め、響がカレーに隠し味を加えたことを話す。

「あなた? 今日のお弁当はどうだった?!」

「ああ、未来の作ったおかずはとても旨かったよ、響のおにぎりも旨いよ、切歌ちゃんにもあげたら顔が真っ青になってたよ!」

「切歌ちゃん、大丈夫だった?!」

「ああ、お茶を飲んで治ったよ!」

和希と響と未来は晩御飯を食べながら弁当の事を話し、盛り上がった。

数十分後、夕食を終え、和希は食べ終わった食器を洗っている。

「あなた、大丈夫? 一人で!」

「ああ、平気だよ、響と未来は夕食を作ってくれたからな、それに未来と響だけ家事を任せるわけにはいけないから、響は未来と一緒に風呂に入ってきたよ、こっちは俺がやるからさ!」

「ありがとうあなた、未来、行こうか！」

和希は食器洗いをしてる内に響は未来を連れてバスルームで風呂に入る。

(未来、生きてる間に赤ちゃん産めるといいな！)

響と未来が風呂に入って数十分後、食器洗いを終え、リビングのソファでゆっくりしてる和希。

「あなたー、未来を着替えさせるの手伝って！」

「わかった、今いく！」

和希はバスルームに向かい、響と一緒に未来の着替えを手伝い、車椅子にさせ、リビングのソファで一緒にゆっくりし、数時間後、和希と響は一緒に車椅子に乗ってる未来を持ち上げ2階に行き、和希は未来をお姫様抱っこし、ベッドに寝かせ、和希は真ん中に響は右側に寝る。

「ねえ、あなた、私達を悲しませないでね、私達のお腹の中の子供が見れないからね！」

「ああ、二人のお腹の中の子供の為に悲しませないよ！」

「ねえ、あなた！」

未来は和希に優しく声を掛け。

「なんだ？未来！」

「私達の子供、男の子かな？女の子かな?！」

「そうだな、未来の方は女の子で、響は男の子かな！」

和希は9月に産まれる響と未来の子供の性別を予想する。

「そうだね、私、頑張つて赤ちゃんを産むね、ゴホゴホ！」

「未来?!」

未来は少し咳をし、響は心配し、和希は未来を抱きしめながら背中を撫でる。

「あなた、ありがとう！」

「響、心臓病の薬は何処?!」

「下のリビングの机にある！」

「よし、響は未来をお願い、俺は心臓病の薬と水をとつて来る！」

和希は下に行つてリビングに心臓病の薬とコップに水を入れ、2階に向かい未来に飲ませた。

「あなた、ごめんね私のために！」

「謝らなくていいよ、俺も響も未来の事大切だからな！」

和希は未来と響が寝てるベッドの真ん中に戻り、寝る準備をする。

「ねえ、あなた、あなたは私の事、嫌い?!」

未来は和希に自分が嫌いかを話し。

「そんなことない、俺は今でも響と未来と結婚して幸せだよ！」

和希は未来に二人の事結婚して幸せだよと言い。

「あなた、ありがとう！」

未来は和希に感謝し、抱きしめ、同時に響も和希を抱きしめる。

(響、未来!!)

和希と響と未来は抱きしめながら目を閉じ、眠りにつく。

そして5ヶ月間、和希と響と未来は新婚旅行や、赤ちゃん用品の買い物や妊婦になつて響と未来を支え、そして予定日の9月中旬。

病院

響と未来の入院してる病室。

「来たよ、響、未来！」

和希は果物が入ってるバケツトを持って病室に入り。

「あつ、来てたんだ、あなた!!」

「よお、響ちゃん、未来ちゃん！」

「剛さん？来てたんですか?!」

「ああ、進兄さんに頼まれて来たぜ！」

剛は響と未来に軽い挨拶をし、椅子に座る。

「あなた、お仕事休んで大丈夫なの?！」

未来は和希に仕事を休んで大丈夫なのと心配し。

「ああ、大丈夫だよ、この日はブレン署長にお願いで休みをとったんだよ！」

「じゃあネオロイミュードが現れたらどうする?！」

響はネオロイミュードが現れたらを心配し。

「ああ、その事は心配するなよ響ちゃん、進兄さんとクリームが代わりに戦うぜ！」

「進之介さんが?！」

「ああ、進兄さん、久しぶりに変身するからな！」

剛は響と未来に進之介が久しぶりに変身すると言う。

「あなた、お父さんとお母さんは来るの?！」

「ああ、さつき連絡したらもう少ししたら来るよ、未来の両親も合流して！」

「ああ、俺のそこは女房の玲子がもうすぐ来るぜ！」

響は和希に両親が来るのを言い、連絡したらもう少ししたら未来の両親と来るとう。

「あなた、私と響がいない時、ご飯は食べてる?！」

「ああ、ちゃんと食べてるよ、後、掃除と洗濯も時間が空いてる時にやったよ！」
和希と未来はいない時に「ご飯を食べてるや、掃除と洗濯の話をし。」

「私と響の方はちゃんと病院のご飯を食べて栄養剤をちゃんとうってるの」
未来と響は和希に病院で「ご飯や栄養剤の話をし。」

ピピピ

「はい、もしもし、おう、玲子か、どうした？、響ちゃんの両親と未来ちゃんの両親と合流したから今から病院に向かうのか、わかった、今、病院前で待ってる！」

「和希、悪い、玲子から連絡来て、響ちゃんの両親と未来ちゃんの両親と合流して病院に向かっているからな、病院前に行くってくる！」

剛は早歩きで病院前に向かう。

一方、その頃、東京シティ

「きゃー！」

「逃げろー！」

市民の声が聞こえ、トライドロンで現場についた進之介。

「グヘヘ、ヘヘヘヘ！」

「何だ？あのネオロイミュードは?!」

「なんだか奴は左腕に不気味な腕になってるぞ！」

進之介とベルトさんは不気味な左腕と不気味な声をしてるネオロイミュードを見る。

「ゲヘヘヘ、チェイサー、何処だー？、復讐してやる！」

「あいつ、チェイサーに何か恨みをもっているのか?!」

「進之介、迷ってる場合じゃないぞ！」

「ああ、久しぶりに行くぞ、ベルトさん！」

「ああ、無理をするんじゃないぞ進之介！」

進之介はドライブドライバーを腰につけ、エンジンキーを回しシフトプレスにシフトスピードを装填し、レバーのように引く。

「変身！」

ドライブ！タイプ！スピード！

進之介は仮面ライダードライブ、タイプスピードになり、不気味な左腕のネオロイミュードの元へ駆ける。

「ゲエヘヘヘ、あれ？アイツはチェイサーと一緒にいる赤い車のクソガキがー！」
ブン

左腕をブン回し、ドライブに攻撃する。

「このネオロイミュード、何だか強いぞ！」

「よし、私が分析しよう！」

ベルトさんは敵をスキヤンし、それを分析する。

「これは？9年前にあったフロンティア事変で響ちゃん達6人の装☒とチェイサー達が倒して消滅したドクターウエル?!」

「何だ？クソガキと思ったら違う人が変身してたか！」

「答えろ、何でチェイサーを憎んでいる?!」

ドライブはウエルネオロイミュードになぜチェイサーを憎んでいるかを言い。

「9年前、僕の英雄の計画を破壊したチェイサーはシエンシヨウシンを纏った小日向未来を痛め付け、シエンシヨウシンを粉々にし、更にネフィリムと融合した僕にとどめをさし消滅した、そして今、ネオロイミュードが僕のデータを見つけ擬人化にし、その隙に僕の魂は融合し、奴をチェイサーを復讐する！」

ウエルネオロイミュードは理由を話し、チェイサーに復讐すると言う。

「そんなこと、お前の好きにはさせない！」

ドライブはハンドル剣を構え、ウエルネオロイミュードに向かって音速で振り。

「おっさんのくせにやるな、だが、これならどうだ！」

ウェルネオロイミュードは左腕を上に向け、雷が鳴り、ネオロイミュードが6体、現れる。

「ネオロイミュード?!」

「奴を入れて合計7体、状況は厳しいがやってやる!」

「そうだな進之介、和希だって病院で響ちゃんと未来ちゃんを支えてる!」

ブーン

「なっ、何だ?!」

戦いの最中に緑の車が止まり、ドアを開ける。

「ハート、ブレン?来てたんだ?!」

「助太刀するぞ、泊進之介、お前の部下の和希には色々世話になったからな!」

「今度は私達が彼を助ける番です!」

「ゲヘヘヘヘ、お前達は誰だ?!」

「おやおや、貧相のないネオロイミュードですね!」

「ああ、教えてやろう、俺達2人はロイミュードで、正義の仮面ライダーだ!」

ハートとブレンはプロトタイプドライブドライバーを腰につけ、エンジンキーを回し、ハートは赤いバイラルコアをシフトプレスに装填、同じくブレンも緑のバイラルコアを装填!

スタート！ユア！エンジン

「変身!!」

ドライブ！タイプ！ミラクル！

ハートとブレンは同時に変身し、アーマーが2人を装着、そう、彼らの変身は仮面ライダーハートと仮面ライダーブレンだ。

ハート・ザ・仮面ライダー

ブレン・ザ・仮面ライダー

「何だ？お前達も仮面ライダーだったのか?！」

「ええ、英雄気取りのあなたと違って私達は正義の味方です！」

「英雄の僕をなめやがってー！」

ウエルネオロイミュードは6体のネオロイミュードを指示し動き出す。

「泊、右側は俺がやる！」

「それでは私は左側を担当します！」

「よし、俺は真ん中をやる、行くぞ、ハート、ブレン！」

「ええ、今日はドライブドライブバーを着けたトリプルドライブで行きますよ！」

「おう!!」

「[[うおー!!!]]」

ドライブは真ん中、ハートは右側、ブレンは左側を担当し、ネオロイミュードと対決する。

その頃、病院の響と未来の病室

「痛い、痛い!!」

「響、未来!」

病室で陣痛が始まり、響と未来の叫び声が聞こえ、和希は2人の手をしっかりと握る。

「響さん、未来さん、息を吐いて!」

「ひーひーふー!!」

「ひーひーふー!!」

看護師は響と未来に息を吐いてと伝え、2人は息を吐く。

「響の親父さん、お袋さん、未来の親父さん、お袋さん、こっちつす!」

剛は玲子と響と未来の両親と合流し、病室の廊下で座る。

「響!」

「未来!」

響と未来の父親は心配しそうに2人の名前を言う。

その頃、東京シテイの街

仮面ライダーブレンは左側の2体のネオロイミュードと対決。

「たー、はあー！」

ブレンはネオロイミュードにパンチをし、攻撃し。

ドドドドト

ネオロイミュードの2体は指先からマシンガンが発射。

「うわっ、よくも当ててくれましたね、それならドア銃！」

ブレンは進之介が乗ってるトライドロロンから銃を出し、攻撃する。

「泊君、お借りしますよー！」

ブレンは集中してネオロイミュードと銃弾戦をし、撃ちまくる。

一方、ハートは右側の2体のネオロイミュードと対決、ハートは2体の敵に向かって強力なパンチをする。

「やってくれたな、仮面ライダーハート、ならば！」

ネオロイミュードは右手か炎が出てハートに攻撃する。

「炎が出てくるか？ならば、泊、借りるぞ！」

ハートはオレンジのシフトカーを出し、シフトブレスに装填。

タイヤコウカン！マックスフレア！

トライドロロンからオレンジのタイヤが射出し、ハートの左肩に装着し、体から炎がわ

き上がる。

「うおー！」

ドーン

ハートは2体のネオロイミュードにめがけて右ストレートし、2体のネオロイミュードは爆破、コアも消滅。

一方、ドライブは真ん中の2体のネオロイミュードとウエルネオロイミュードと対決。

「グへへへ、たった一人で僕達に敵うとでも思ったか?!」

「甘く見ないでくれたまえ、私と進之介は19年前、これまでのロイミュードと対等し、最後まで戦い、勝った！」

「ああ、どんな時があっても、くじいたり、焦ったりもした、けどベルトさんがいたから俺は変わった！」

「進之介、ありがとう！」

「ベルトさん、あれで行くぞー！」

「OKだ、久しぶりにあれを使うんだな？進之介！」

ドライブはベルトのエンジンキーを回し、赤いシフトカーを出し、シフトプレスに装填しボタンを押す。

ドライブ！タイプ！トライドロン！

ドライブがトライドロンと合体し、姿が変わる、そうこれが、仮面ライダードライブ、タイプトライドロンだ。

「何だど？赤い車と合体した?!」

ウエルネオロイミュードはトライドロンと合体したドライブに驚き。

「フッフ、これが私と進之介が19年前に戦った姿、ドライブ、タイプトライドロンだ！」

ベルトさんはウエルネオロイミュードにタイプトライドロンの説明を軽く言い。

「そんなの只のこけ落としだ、やれー！」

ウエルネオロイミュードはドライブに攻撃する。

「全然効かないぜ、今度はこっちの番だ！」

ドライブはシフトブレスに着けたトライドロンカーの表面を触れ、左腕をかざし、紫、白、黄色のタイヤが左肩のタイヤに装填。

「おりゃー！」

ドライブの左肩からミッドナイトシャドー手裏剣が発射しネオロイミュードにめがけて当て。

「次はコレだ！」

左肩のタイヤがハンターに変わり、ワッパーみたいな物を出し、それを持ち、めがけて投げ、すると2体のネオロイミュードが牢屋みたいに閉じこめ。

「最後にこれだ！」

左肩のタイヤがダンプカーになり、右腕にドリルを着け、閉じ込めてる2体のネオロイミュードに向かって突撃する。

「うおー！」

ドーン

「ギャー!!」

ドライブトライドロンのドリル攻撃に当たり、爆発、ウエルネオロイミュードはダメージを受けた。

「泊！」

「何とか倒せましたよ！」

ハートとブレンはドライブと合流。

「よし、ハート、ブレン、とどめをきめるぞ！」

「ああ！」

「はい！」

ドライブ、ハート、ブレンはドライバーのキーを回し、シフトブレスのボタンを押す。
ヒツサツ！フルスロットル！

ドライブとハートとブレン高く飛び、宙に回り。

「僕はまだ負けないぞ！」

ウエルネオロイミュードは左手からビームを放ち、ドライブ達に攻撃。

「なっ？効かないだど?!」

そして奴に向かってドライブとハートはライダーキックし。

「おりゃ！」

「はー！」

「最後は私です、ライダーヘッドバット！」

最後にブレンがヘッドバットし、ウエルネオロイミュードに命中。

「最後の方は、キックじゃなく、ヘッドバットだど?!」

「あいにく私はキックは似合いませんよ！」

「バカな、僕がこんな奴らに負けた！」

ドカーン

「僕がまた消滅？ギャー！」

バリン

ウエルネオロイミュードは爆発し、ウエルのコアは粉々になり、消滅。

「ナイストライ、なかなかのトリプルドライブだったぞ、3人とも！」

三人は変身を解き、クールダウンした。

「ああ、これで来年は息子の英二がベルトさんの相棒だ、ハート、ブレン、今日はありがとう、来年は英二の事を頼むぞ！」

「はい、おまかせ下さい、次のドライブになる泊君の息子君の方は切歌君や調君や私もフオローします！」

「ああ、こちらこそ、泊、今日は本当にありがとう、感謝するぞ！」

進之介はハートとブレンに感謝した。

その頃、病院の響と未来の病室

陣痛が2時間以上かかり、まもなく響と未来のお腹の中の子供が産まれる。

「いいよ、響さん、未来さん、いきんで！」

「うーん、うーん！」

響と未来は強いいきみ、和希は2人の手を強く握る。

「未来、響、頑張れ、俺がいるぞ！」

「あなた、私と響、もうすぐ産まれる！」

「いいよ、頭が出てきたよ二人とも！」

看護師2人は子供を持つ準備を構え、和希は2人を応援する。

「もうダメ、私と響、産まれる！」

「未来！響！」

「産まれるー！」

そして

「オギャア、オギャア！」

「オギャア、オギャア！」

無事、響と未来のお腹の中の子供が出産した。

「おめでとう、青島さん、響ちゃんの方は元気な男の子で、未来ちゃんの方は元気な女の子が産まりましたよ！」

看護師2人は和希に産まれた2人の子供の性別を教え。

「抱いていいですか?!」

「もちろん、いいですよ！」

看護師は2人の子供を和希に抱かせ、和希は顔を見て泣く。

「あ……お父さんだよ、2人とも、はじめまして、優吾、美歌！」

和希は抱っこし、響と髪の色がそっくりの男の子を優吾、未来と髪の色がそっくりの女の子を美歌と名付けた。

「美歌ちゃん…… 未来お母さんだよ！」

「優吾君、響お母さんだよ！」

未来は涙を流し、微笑み、産まれた娘の手を握り、響は微笑みながら産まれた息子の手を握る。

「うう、響、よく頑張ったな！」

「未来ちゃん、頑張ったわね、お母さん嬉しくて涙が出てきたわ！」

響の父親と未来のお母さんは涙を流しながら響と未来に頑張ったと言う。

「剛、響ちゃん達、産まれたわね！」

「ああ…… うう、玲子が晴樹を産まれた頃を思い出して涙が出てきた、玲子、俺、進兄さんに電話してくる！」

剛は思い出に泣きながらスマホを出し、進之介に電話する。

ピピピピピピ

「はい、進之介、剛？ どうした？、そうか、響ちゃんと未来ちゃんの子供、無事に産ま

れたのか!」

進之介は剛からの連絡を聞き微笑む。

「和希君、おめでとうございませす、父親として頑張つて下さい!」

「ああ、俺達も頑張るからな、お前も頑張れ!」

ブレンとハートは心から和希を祝福した。

「そうだ、進之介、霧子にもこの話をしよう、きっと華やかになるぞ!」

「ベルトさん、英二が学校から帰つて来てから話すぞ!」

「ハッハー!.. 和希、おめでとう!」

ベルトさんは進之介と口話をし、和希を心から祝福する。

そして、事態が悪化する、数日後、未来は美歌を出産した後、容態が急変し、咳が止まらなくなり、胸が痛くなる。しばらくは入院生活をする事になり、響は優吾と美歌と退院し、和希と一緒に2人を育て。

「うう.. あなた、未来が!」

「響、心配するな、落ち着いたら優吾と美歌を連れてお見舞いに行こう!」

和希は泣いてる響を抱きしめる。

そして未来が亡くなる前の10月、和希は響と優吾と美歌を連れ、未来が入院して

病院に訪れる。

「未来、来たよ！」

「あなた、響、美歌ちゃん、優吾君！」

「よお、未来ちゃん！」

「お見舞いに来たわよ！」

「進之介さん、霧子さん、ベルトさん、いらつしやい！」

進之介と霧子も未来のお見舞いに来て、ベルトさんは進之介の腰に着けたまま。

「あつ、そうだ、未来、1ヶ月早い誕生日プレゼントだよ！」

響は持つてる紫の紙袋を未来に渡し、誕生日プレゼントと言ひ、未来はそれを開ける。

「わあ、これ、私が欲しかったブローチ、ありがとう響！」

中には未来が欲しかった紫の花の形したブローチだった。

「未来、俺からのプレゼントはケーキだよ、食べたかったフルーツタルト！」

「嬉しい、あなた、ありがとう！」

それから数時間後、和希と響と進之介と霧子は未来を祝い、フルーツタルトケーキを

食べながら今までの事の話をし、病室は穏やかに。

「進之介警部、俺、美歌を連れて外の空気を吸ってきます！」

「ああ、気をつけろよ！」

和希は美歌を抱いて病院の外に行き。

「未来、ちよつと優吾連れて外に行こう！」

「うん、進之介さん、私も響もちよつと外に行つてきます！」

「ああ、未来ちゃん、あんまり外に行くなよ、ちよつとだけだからな！」

響は未来を車椅子に乗せ、優吾を抱き、和希と美歌がいる病院の外に行く。

病院の外

「美歌、外の空気は気持ちいい?！」

「きやきや！」

「そうか、良かったな、パパも嬉しいぞ！」

美歌は外をみてきやきやと喜び、和希は嬉しくなる。

「あなたー！」

響は優吾を抱いて外に入り、未来は車椅子を動かして入る。

「未来?外に出るなよ、咳がまた止まらなくなるぞ！」

「大丈夫よ、あなた、進之介さんにちよつとだけOKもらったのよ！」

和希は未来の事を心配し、未来は話す。

「あなた、美歌を抱かせて、美歌にちよつと言いたいことがあるの！」

「あ・ああ！」

和希は未来に美歌を抱かせる。

「美歌：お母さんからの最後のお願ひよ：これからは和希お父さんと響お母さんの言うことをちゃんと聞いて心配かけないでね、未来お母さんは天国であなた達を見守るからね！」

未来は美歌にお願いを話す。

「未来！」

響は優吾を抱きながら未来の車椅子に近づける。

「優吾、響お母さんと和希お父さんの言うことを聞いて、美歌を守ってね、優吾は強くて優しい美歌のお兄ちゃんよ！」

未来は言いながら優吾の頭を優しく撫でる。

「あなた、響と一緒に優吾と美歌を守って強い子に育ててね、あなたは優しいみんなを守る仮面ライダーだから！」

未来は和希にこう伝えると。

「嫌だ：俺と響はお前を失いたくないんだ！」

和希はこう言つて未来を抱きしめ。

「仕方ないよ、こんなに我慢してたのに……私だつて嫌だよ！」
未来は両目から涙が流れ。

「あなたの側にいたい、ずっとずっと、長生きしたかったのに、子供が大きくなつてお祝いとか……響と美歌と優吾とあなたと一緒に思ひ出をもつと残したい！」

未来は泣きながら和希や響や優吾と美歌と一緒に長生きや思ひ出をもつと残したいを言い、響は黙つて涙を流していた。

「未来、俺も響も優吾と美歌と一緒に思ひ出を残したかったよ！」
和希は涙ぐみながら言い。

「あなた、あなた！」
未来は涙を流しながら和希とキスをし。

「あなた、響、最後の約束を聞いて！」
未来は涙を拭き、響と和希に向かってこう言う。

「私がいなくなつても、ずっと忘れないでね！」
「うん、私も和希君も未来の事、忘れない！」

「ああ、俺も愛してるよ、未来は俺と響と優吾と美歌にとっての大切な思ひ出の日だま

りだからな！」

和希は未来に愛してると言い、もう一回キスをし、次に響が未来とキスをし、2人は未来の手を離さず握った。

「あなた、響、愛してる！」

それから1年後、2035年、現在、12月になり、和希は星の見える森でチェイスと未来の墓に花を供え。

「未来、メリークリスマス、今日は景色がいいよ、優吾も美歌も1歳になって歩けるようになったよ、響の方は料理は旨くなって、俺の方は仕事や響の料理の手伝いや掃除や洗濯を忙しいけど安心して頑張ってるよ！」

和希は未来の墓に響と優吾と美歌の話や自分の事を語る。

「じゃあ、家に帰るね、未来、響達がクリスマスの準備して待ってるから、今度は安心したら響と優吾と美歌を連れて会いに来るよ、シグナルチェイサーとチェイスさんの免許、俺が持つて帰るよ！」

和希は未来の墓のシグナルチェイサーとチェイスの免許証を上着のポケットにしまい、ライドチェイサーに乗って、未来の墓に別れを告げ、響達の家に帰った。

（あなた、あなたは今でも焦らず頑張ってる！）

未来の墓に光の影が見える。

そして瞬く間に6年の歳月が過ぎ。

2041年

「父さん！」

「響お母さん！」

成長した和希と響と未来の息子と娘の声が聞こえ。

「はーい！」

「今行く！」

和希と響は2人の元へ歩く。

和希と響と優吾と美歌の家、家の写真立てには小学生になった優吾と美歌が写り、和希と響、響が持つてる未来の遺影写真が写ってた、写真立ての隣には2035年に和希が過去から手に入れたアガートラム、イガリマ、シエルシャガナのシグナルバイクとシエンシヨウシンシフトカーが置いてた

END